小説雜誌

七

大正十三年八月上旬起筆

特別
イ4
1919
365

38- 9154

176633

□新潟浄土の日〻友三浦旭村の新潟年枝の一冊を携へ来り贈る、既に出版の広告を東都に送りしかば家毫も鬻くを以つて素こもて其の時を受く旭村は余が心里の家の醫にして余年の頃之れを知る、此書巻首に旭村の序あり書面の序あり書は巻首に序あり、化に寄つて新潟の富田旭山之れを書す、巻末湖山の跋あり、詩は三十二首、甚巧みなるも新潟の風物を真写して能く旅客をし、往て深想に浸らしめるあるは世化者亦氣時代の感化なるかなり、おもふに北海の清丈境に於て讀めば一篇趣味を覚ゆ、況の新潟の日横川之れを讀み往て微笑を禁じ得ざるものあり。

心者の卷末後こかくて去年の歌を掲げ年の歌
吹海と決断のことを自向して敬ふ不可其の去
年[illegible]愛すべし、立春晨し生ず、必ず例
のごとく北斗の酒を品賜して仲枝の体を得す
るを評せん、今は其人亡し（故）今一二を紹す

後歌 慶応戊辰歌寄 一天中分の行情楽土不知
真真是 俗歌 [illegible] 橋浦狂歌
数行 [illegible] 良辰、脇坂郎 [illegible] 新
一様術歌 拍手喝采 白山尊是 白眉神
爺 [illegible] 天涯、蜑霧 [illegible] 煙 音信 [illegible] 陰
自有春風列 山桜無主也開花
[illegible] せきる [illegible] 海峯を照るものあ
り是を辭せて比潮の紀念とす

○郷國の情の世界、帰省の情を過るの運動と
もいふべきか、眼前に横はるの山川は昔を紹ふ
親しむ所のこの国山川無情といふも、[illegible]
[illegible]一歌の情無しんや、山川必ずしもこれを知ふ
のあるべし、其の印象がことく思ふ一種の快感と
受ふの吾が情の如くしもるること、親族故舊
[illegible]を訪ひ来の談笑往を語き人うと伝す此間の情
結言可らざるこの間、酒楼に上り酒楼の一杯の情
酒楼の舊識、[illegible]、賞玩
[illegible]郷味[illegible]所のこの必ずしも美な
べきこの[illegible]、坐客[illegible]土喜縦横校書郷歌を[illegible]味の掬す
延ふ他邦の人或は之を[illegible]一種の情味

を感ずるか故に其郷と同ふするか故に、時に岐路を
隔てる旧知の老校書の席に来つて喬雨を語るあり、
夜深かしても酒を貪り帰臥の時を失するも敢
て云ふとなく、轉飲亦轉飲、一杯を擧れば興更る
新なるを覚ゆるに、郷土[illegible]ことを都[illegible]れ
[illegible]湯さる所なり、[illegible]既に老の壮時と同じことを演じ、壮者と歓を
[illegible]老を忘るゝこゝの郷土
のお蔭と云ふべき歟、白晝岐を載せて汽車に上
り、深夜岐と同乗して自動車を駆る、癡態笑
ふに堪へざるなり、莫れ此間多少の情緒あり、唯
此氣尚豪なるもの春を買ふの勇[illegible]老を歎ず
[illegible]郷国に於て甚し、[illegible]

而して郷国に於て之れを歎ずる尤も痛切なり、新潟の人
客を始め亦酒を好む、帰者毎に人を招き多く酒
杯を上り、[illegible]酒を忘れ[illegible]
[illegible]迷惑の感なきなり、然れども何の人
なんぞ旅食を獨せざるを熟れを、帰者の一快は酒を忘
るゝに在る歟、客中人を招き欲する亦一快なり、因て酒
[illegible]主客共位置を換へば興亦一[illegible]新する
なり、五人帰国ごとに人を招き銘茶を飲む三十年来
[illegible]戎十回なるを知る、而して此情[illegible]の人を招くは其
此稿なり、今次友人を一少招き翌朝拝を徴しる立
十金を擲つ、霸旗の散財は君子の戒める所なれども
其の義則なる所に趣味はなす、人[illegible]招かんと云ふの之れ

酬（さるハ一つの苦痛なり）（予）未殊に北の苦痛を云へふ、君
子の恥めに交く所以なり、
新潟に留連の一快ハ五岑と酒楼に上るなるべし五岑
我人の新潟に来る毎に必くすゝ迎へて共に痛飲或ハ席上
毫を元いし或ハ詩を賦す酬酢の後郷歌を謳
ふを喜んもして和せしむ、而して北人此年折き今ハ
元し今次の帰省に拘迫らぬ感あり故ハ北親友を
離きたるの故也
新潟に於ふ毎に妓の追分節を謳ふを聴く、地方
なるを以て特徴ある地方歌なり、其土地に於ては其土地
の唄を聴くべし、聴て一種の情味を感するなるべし
他に聴き得さるのあり、今次佐友余を拉して深更

下町に抵る下町ハ故廓の名所なり、追分節の如き
（此謡ことゝく在り）枝書の等級下るが故に第一酒楼
に来る特に召すあらさるハ来らさるなり、北夜潟
偶に二妓のめの言を弄するを聴き得なり、甲妓先つ
謡ふ、余激賞措かす、思へらく之を作して云ふ佐ん
無えと、其妓他の一妓を作して云ふ佐ん
の謡ふを聴けと、之を聴けば更に一段めを覚ふ
ふ所在なんと此の郷歌を聴けと、北夜聴き
る一妓の裏を迎するの謡あるを聴き
ハ北妓の郷土に来て（者郷也）
さる也
新潟の妓一種郷土なるまゝを帯び他邦人之を聴いて不快

を感ずと云く彼れが如き美貌を有して何んぞ其の言語の粗野なる歟の誘るハ色消しなることゝ吾郷国を同ふする云れと雖も亦同歎無き能はさる也、然るに今次の帰省多くの妓に接す、二十年前後の事なれ、言語、頗る改まり、亦四時の比なあらず、交通の繁華昔日の教育等北の美化を生ずるに共つて力あることを見るべし、数年後に至らば幸に特有の訛ハ遂に跡を絶つこもらん歟

今次の帰省大隈侯を伴ふ、新潟に入るの翌日久須美([illegible])後藤([illegible])若の東道にて弥彦に登る、新潟より弥彦まで汽車時間一時半を費す、久須美特に特別車を設し、車中酒食を置き、名妓三人を伴ふ、大隈侯

一妓に云を嘱し、傍らに侍せしめて得意の色あり、余の傍らに坐せる一阿嬢に命じ余の手を握る、余戯れに之れを一行に示す、皆同く おやすくないと、余の艶福を称す、余曰く日本婦人の握手ハ西洋と同しからず、頗る重大の意義を含む、握手ハこれ其人に許すの象徴と、蓋し北妓の態度に不満を抱き余を慕ふて皮肉を洩らすなり、余その意気を快とす、

巻芙湖の米點山水一幅偶に浮世絵師の書幅を好まず、架中僅に一の戯画と雖も多の趣味あり、上頭に粉彩の歌字あり、曰斯ものあるさんハ北人の幅有の紀念([illegible])と云ふ

一魚

乱世を北政所に無断を消
す様のことを拵かせるこんそとの思ひ
入らず、偽れ日向に得るを柳沢保と石田三成の
倚る、此の二者ともに人の完を害ぬ為の
僞を出しとるるを、其人は其来所位の卑賤の人と
目さん衆れ金を餌かし、そうを云くば人
必ず野心を聯想し、こんな者の弁護する者
の人は其の弁護する人も邪悪の心と做すの人情
なり、然れども誤解を受くる人多し、世の
人のこと(僞)とを相市の瑕瑾あるべきも
[illegible]
保の治世なるを以て吏格に長ず、皆を得易からざるの

政治家なり、おを乱世の拙て人の耳目を驚動する
なり武勇なり、加藤清正晩節議すべきものあと雖
も其武勇に眩惑して今なるも清正公として神の
如く知る豊公の遺命の忠誠を忘れて私闘
を三成に構ひ、家康の乗ずる所となるを加藤一家
の徒なることを、三成は清正と比べ百倍の智謀あり、
家康の就終する所となるを豊公の遺匠
中其人を求むれば其人を三成と屈せるを得ず、
惟だ智謀あるを往々人の誤解を受く武勇一
辺なりの木強漢のみなき単純性なるかの如
き保七成る意味の拙て三成と相似るもあり其の
長所を得て政略を專決し其の為すを旨とする

七累進する所あり、甚だ似て、而して表裏を得て改
移を專斷すれば專恣の誹り起り累進すれば
同僚の嫉妬憂と生ず、有人の毒邪を以て目さ
れんとするの必憂こゝに存り、如何せん世を改
め家を一新の厄に遇へさるこの小変を如何せん必憂
自信を徹せざれば多学、自信を徹するの報
酬は暗殺に過ぎざるか然らざれば誹毀に過ぎざるか二途何
れかあるべきを可知、有人を保護するの二傳は未だ
詳を悉さゞるこのあり、然れども或る方面の完き
のゝ如き雷き得ざるかなし、古来英傑の行事稚を
尊ぶを初めとせざるこのあり、二家のごときは稚を
[illegible]未だ過稚と失過例也

十二

○満一年前、一昨年大震災の後、[illegible]大限の後
弱けれる弱りの回去の過を書面に悔を[illegible]る大事
七八、その後を引えることもなく、其後[illegible]きた
る事、北海曝[illegible]文三月入[illegible]をちんとなる程
うも番[illegible]の點検をうかゝ三日ばかり考へて
なる〳〵元補べせしめ[illegible]、すこ
しのこりやカゴを見るのみなれば差しとることもな
しといふの先つあるべし[illegible]
限に弱けおかんハ何[illegible]
[illegible]の大事を家に所[illegible]
二度目を入れ、さて[illegible]
面倒を[illegible]
震災前ハ[illegible]

なるべく、それが一直きに花ハなりとも、いろ〳〵工夫を
しもと直きしてその他の枝の入るる外へ移しを
どうして漸やく四不と後しして見るに八個の木箱枝
書畫幅の数四る数も年れば、十もある幅表を
チヤンと片つきなり、常ハ大隈公の数ある花瓶百
数函あるけれども、それを皆ようとすれば引えんとす
るも能わず、玄関につく〳〵十二畳ほどのの建物、元来
こしらえる上ハ別座敷を入るるの地ハ、震災
前花瓶を入れ置きなりしを生憎次の間の床と
三間の押入れとが工夫なりがたく、災後場い
得なり図書を埋まるなりも十畳をつくるの地位
なるも、三ヶ月ハ出版部新築の倉庫の成

えず、共折衷に移すことを考へ合せ花を預け
おくなり外に術なし

四畳半花幅を数枝一幅五歩を占めるも
得なるものあり、それを浦上春明氏が和歌の
課題に詩を和しなるものなり、難題出公
の題なり、和歌の題なるハそれ其の書きこなハ
すべて和歌の式に擬して懐紙に認めなり、こんど
ハ氣なつかなるしかこれを光源山陽の書なる
資料を得んとそれも渡田徳郎と訪ひ日曜次郎氏
の待こ山陽が雅号を加へくるを一読せり新渡
田氏氏なる貴名海屋の懐紙に詩を
録しなるを課題なる同じく懐紙に今
同貴

なり、最資愛が山陽外京都文人を合せ
折春琴も招えんとすることを聞き浅田の
宿しかし春琴の心入めの板なる
ものなるべしか、想像つかざるしかし何人を問ら
人共のこの人口か紫中の花しあることを知ら
さるべし、別く来歴分明なるを得ても
此一幅も亡子りしものとなるべし、日野家の花
しあるべしこの海庵のと思しうる物なる世の
出ることなるべし、史書面の前生を浅田を
の記のあんいこいうる吸す、山陽なる和さへ
春琴の詩も海庵の詩と共に収むべし
○去る十二日過ぎあるべき晩世を訪ねんと慶法寺の

氷菓なるものを嗜みん折から、帰るを
ことの暑熱の苦しきを忘れ、十一時半過ぎ
こ着午前の後鉾尽く災後の状を見る折かんと思ひ
立、娘を伴ひ列りつる、鉾尽を復年焼後の
しく静寂なる地なるも因縁浅からざるなるを
災後こゝに来る見る様なるを得さるべしか今一
週年なるなる北の地なる様なるを得ざるべしか
建長円覚の諸寺を訪ねんと欲せしか、炎熱甚
しかるべし果すを得ず、僅に円覚寺を
八幡宮なる大仏、其こに古刹の残りこるきさらし
最早バラック普請の後無なる様なる成りたる
当時の境状を見る能わざるも、八幡境内の石造

華表と称する数基の石柱、石橋を渡りて石段を
登りし、遥拝殿と崩壊とゆゆしきまで崩れ
其礎石を見るのみ、唯此廃のことなるを石燈籠
側の黄楊木の堂々たるを、時を得顔に漠き氣
さ、なる紅とを、附近の人家に咲るバラックの
搗くれ、白き建物に一字もあるなし、停車場前
より電車に乗り市内に出で、赴き先づ四祖の旅館
三階を高所とし、さしもの廣き大旅館
七住宅とし、唯此西門を有するのみ、後無名
投宿見くすし、附近を人家に咲るバラックと変し
て、営業数月借りて毒を養ひとる某氏の別
荘も数焼しなりと云へり、然れども、然しく
数方もすし、然しても

大仏を拝のん境内拝殿の裏に祝めさんと、大仏を
載せる礎石をサンくる揺さき氣なして、仏像もず
しく前にのめりおる拝見受けなり、附内八幡宮
の大破にて入口閉鎖し、塔婆なる状態
に激変を追懐せしめなり、一茶庵を訪ひて氷を和
して美酒を飲け、碎氷と乗して車中片瀬腰
越迄のまで行き待の時を切りて再ひ出発して
市中を通りて後無の状を見、停車場
前の一茶庵に晩餐中、茶屋の路
す、茶屋は二震災の路田舎に
路寓なるとの、災後なりて初めて也
○昔一八俳諧の志きり四方に漫游し、晩年松島の

貯へるものと行く先くらゐ好みを得て高く漫投を
得たるものにあるべき芭蕉の貴法にとりて俗人を使
する多くの場合もあるべしと云はんもあるべし云ハドンナ
と云へる人を訪ふるを始めるべく人の迷惑ならざる時刻
を選び午後の二三時をとるべきなり故に注意して
おくべし訪問すんばそこに一向することなきなり
亦同じ家を二三度訪ふるハ云ふまでもなく
親密もあるべしさして人を訪ひて自分の心を示す
おのづから定めがあつて四五二三を知る外余中
の口占甘家を訪ひ利那の感興を知するを法と
して訪問を受けたる人から云へば句に和しなり
旧化を示しなるまい勿論ひまを俗客を充分投価

かある場合に一巻の連句を作ひまるのなが追々芭
蕉の定めに従ひ乱れて時々人を訪ふことを
なり訪ひ出でまん実許の金さく奥くんハそんび義
理の渦むるとなく做して面倒がりて座敷をやら
ぬ様なるなるに俗客ばかりを座敷をやら
ろい話が働つてゐる集の紀を守る時代おもし
してある家に到り主人と
訪ふ事に那お許しを得て
いと主人ハ御遠雪を及心ぬお着くなるとして
主人を呼き俗客を行書をひらき着くとる衣服
を見んバ綿黄八丈の縞つくめひ訪ふ時々未
綿の衣類を着けゐるとそん、こハ格あのあひ

り、主人これを見て氣輕さに何の着換をさせに特に
人の許諾を求めらるゝやと問へば、紙冬曰く實ハこゝ
くことき文を以て招ぶこゝハ一種の遊民ともいふ
べきものにて、各家に詩の作ることを傳へ、一泊を請ふ
とて奢りがましき服裝をなすべきなれども、
木綿の衣裳を着けて初對面をなすの微意
ハこゝに於て、所謂元亨遊民の面目として木綿
の衣服を慣んずして肩襷りて居る石快なる
さんぷをいつて主人の許諾も得ずして勝手のまゝ生
来かさく、特に お許しを待たれて浮と語り、主
人も初めて其意を領し、必ずまもと感じ、紙
人も彷彿奥床しく礼を守りし時代なりし

○炎暑を冒して上京後の二三時
間を費す、多くの基礎のうち、僅うたの数書を得
一 古葉略類聚鈔　六冊
北方ハ廣達長二年の興書なる由来なる
原本奈良の春日義定神主の家に傳へ
つゝあり、鎌倉時代に於ける和歌を
類従したるハ、これと後京敦隆の類従
古葉とあるのみにて、類従古葉ハ略類
従鈔なれども時代古く、類従の体制
も二者おのづから異なり、萬葉研究
家が明らかにすべき所なれども、此

久しく世に埋もれず、契沖が代匠記を
作りし時、此書を参照し得たりしと
いふ、徳川吉宗の時、漸く此書の謄写を
著者研究家に示されたれど、原本
を見ることハ頗る難かりし、惜しいかな
此書ハ寛文年間現在存せるもの五冊
内四冊ハ若宮神主の手にして移りて
今ハ奈良の郊外佐保村興福院に
在せり、内一冊ハ供して佐保木住院の家
に在せり、今次婚ひとりて佐保木等
が帝国学士院の補助を得て五十
部コロタイプ版に刷行したるなり

現存全部収めあり、尚附録一冊ありて
橘本進氏の詳細なる考証あり、佐保木
博士の校勘記を載せたり、原書を
最近国宝に推薦せらる、垂仁本
書附録に存す

一手記回式　一帖

寛永三年伊勢国博学常安自筆
と記したる手紙の染筆を天保五年栗
原信充の上版したるもの、有職の一部
今ハ稀なる出版のうち

一 鶏百珍料理秘密蔵　二冊

天保十年の版を寛政七年補刻したるもの

なり 其百珍豆腐百珍の数に一時百

珍と題号したる物の調理法を出版

したること流行し、北斗と玉子百珍、献立

集、海饌百珍などの出版刊行されたり

りと雖けとも、其さいまだ手に入らず

一 四方の土産物　二冊

四方の赤良の雑文をあつめたるものなり

さまざまあるなれど皆問こ此巻を

見ること甚だ稀なり也　巻首に文政二年

真顔の序文

一 竹島雑誌　一冊

明治四年松浦武四郎の刊行所、蝦夷

の小島なるもの日露

両国の地なりしを特に此島を渡り

て北の不毛の島を世に紹介したるもの

なり北海を詳叙する者此のみ

なるべし

八月十吉記

○昨十吉余が宅に大隅彦傳記編纂会をひらく有

級中略其他巻序、似し業者の一人相馬を除のみ、
豫約の如く十月一日中巻の原稿全部を印刷所に
交付し二ヶ月間に印刷を終らしむるに八、進行上諸
般の準備を要す、第一八原稿を三四筆の暇迄
者に回ハして其の閲覧を経る可らず、第二八閲
覧者の意見ある所八訂正を為さゝる可らず、
此の二件を九月中に完了しうるもの八十月に原
稿を印刷に附する能ハさるべし、最後早日子四十
餘日を剩さゞる所、幸に武富寅治氏の四の
四氏八第二巻(中巻)の原稿をおよそ日を追し
て之に付回覧日の如き日子を要すを要セ
ず、業者書きたし、努力すれハおよそ九月中

原稿を得ん事を望し、此度く回覧に供し得ハ高須執
筆の部分のみを大体好評なり、相馬執筆の部分ハ
初巻に収むべき部分に属する所、冗漫に失して筆
致高須に譲ること大なり、別度書き直しを要す、
而して文章の統一を保つ為め高須に改稿せし
もの外なけんも、下巻の稿繕すること上高須
に取らんと欲す、元也、相馬の感情上今直ちに高
須と書き直さゞるハ利なり、由つて当月下旬すべて原稿出来ると雖も高須相
馬両人の挽回を一旦解き其上に高須を改め
て脱稿する事と内定す、下巻も相馬の執
筆なる一部分なり、最後の高ゝ、これも別

書き改めさるを得ず、下巻の原稿を渡すべき
必要須の努力を要するハ此篇と共に、大要略備
難篇の方議有のことゝ、浩篇の内に漏れし
る数多の事実補説を要することゝ思ひつき
を要須として筆録せり　十七日記
○木崎愛吉の近く著つし所の篠崎小竹が坂
習と題する論文を録する材料　を得
ひ申つて一夜通読し、格段の事新らしいことも
無つたが、大塩事件の動機が委
しく書いてある、天保八年十月十七日が月ケ瀬を
出の帝守中の記に出来、十日を急を要へ
ばが、老躰と注意を受けて、南都を回り立く

き帰ることが出来ず、ヤウト帰つて見ると尼ケ崎の
家い火災を免かれたが、人心皆々もつて其家の
主人が大塩の者と、疑かし、其の累こかゝる、こと
い迷惑しこと云ふ、此の際のことゝつゝえら
世ることゝ云ふ（二日）の出来ずして
たゝ木崎の文を和録する
天保八年の二月野田笹浦等と同伴、大和良れ
教授の教授を勧める四門八岡菊平を来
道して、月瀬観梅のお供をした、こんと
り先、同二年の春、井田とあ人、山陽と談ん
ばが、其人世の為めに果さるべきの
を、こゝに如何を思ひ立つたのであつたが、この

然るに大坂の大塩騒動に、船場の者いかに
と心配して伺ひに見えんに、家内ハ変事もなかりしの
の好いが、こゝに一つの思ひの外難儀なかりしと
見えたるは、篠崎家の借家に山田
大助といふ生薬商屋がありしが、この男ハもと能
勢の生んで、出でゝ田地七角ばかり所持してゐつ
た大助の元来義侠のある男、大塩平八郎が
腕も敗んとの心ひ出でゝ百姓を誘
らうと、千人強りの同勢を仕立て、七月三日の
夜から池田伊丹を通りを暴れ出ハつたが、大坂
から役向の人々出張の上、池田郷士に命じ鉄
砲を持て打向はしめたから、烏合の衆ハ思

ち散乱し、首魁の大助も鉄砲疵に自滅した
ちつと
えび騒動は鎮まるとは、大坂の山田屋一類八軒
中附も、家内の廃絶（没収）になる。家宅捜索の
結果、大塩の義し文（檄文）が出たので、何者から
手も入んとかと人心味の未、それハ家主の篠崎の
人から借りて言ひまして、と、大助の娘が白状し
たとのこと、篠崎ハ寄宿の書生として外出を
禁じ、えんとの上、山田屋書生入牢中ハ無事
仮代一昼日で、一年余りも頁撞させられ閉
門ハ翌年十月初旬：赦免を蒙つたとの
附けかくて、大塩平八中前ハ、三時ま

為人ひとのあつ比人ひあるゝ、
垂曲の事ハ世ハ芸左金吾ハ世ハ宮の七比二
月の比間と あるから、ゑんを たゝ引く
本月書家簡抄 (遊) 柔和見付、從尾山(月
歟)一絶を 修受、相伴 いらして 御食心二番
御無云ゝ 柔盛 於彼地人回大改大
ゑゝ し、燻煤元来として、未審其狀、日三詩
時、雨中 三月三日 ニ著く 柔良の東方 ゑ人ゑ
也狀到来、兵乱の敬都、木津ゑ 也と 伺時の 本の
入南都而後 の伺とのゑゝ、不安心 ニ 一番 ニ
御心ゑ 一士人(御使者の 抜ゑ、三月 ゑ、夜中
逆旅を 被呼、故、其人ニ南今、久 抜、ゑ、天満神

天満(菅也候の 菅 御 ハ今の天満川端 (遊) 都 ニ
歩ゑ) 十九の 若鳥 方ゑ ゑ、 同 其 火 則 回、 忘 其 姓 ハ、
(其、 か 抜て 渡也 候 世 ゑ、 近 頃 ゑ 也、 少 絶 来、 人 乱
坊 と の ゑ と 其 の、 知 若 大 塩、 喫 一 鶏、 ゑ ニ 入 南
都、 其 理 伺 也 抜、 如 示 韓 也 ゑ い 先 災 也 し、
必然 抜 及 初 先 墓 の 寺 (天満 時 寺 天徳 寺) ゑ
と 一 切 若 燻、 其 上 燃 首 未 詳 其 時 ゑ 抜、 今 の
ニ ゑ ゑ、 都 ハ 未 稲、 先 人 (三 時) ニ 時 ゑ と
抜 復 ゑ ゑ、 和 ハ 言 い 抜 ゑ ゑ ゑ 近 来 王 学 ゑ ゑ
ゑ ゑ ゑ、 著 也 の 抜 ゑ 不 被 示 刊 行 ゑ ゑ ゑ 自 乱
ニ 陳 述 ニ 推 移 ニ 乱 如 也 ニ 甚 其 ゑ 個 者、
於 今 未 審 ゑ ゑ 狂 乱 ニ 字 ゑ ゑ 其 ゑ い ゑ ゑ 抜 抜

次年夫々を被仰、よし、定而罷とゝ有
以下略
三月廿二日
前略
一市夏ハ御個ゝ、其後略御倍宅ニ被ゝ
借屋のゝ、能勢山ゝ、後徒乱妨、砲死其
家ゝ塩賊搬文有し有ゝ故、壁ゝ有ゝ、
よし家人ゝ出、其清れしの時、僕ハ人ゝ出候
を国護ゝ、義兵、三ヶ月ゝ閉戸被仰
付、十月初旬無事蒙赦ゝ御ゝ右
如何ゝ棄置、得罪於被為、ゝ有ゝ
ゝ

後略
臘月三日
宛名の宮谷左金吾は弼を出羽といひ
津藩の支書伊賀上野の藩士なり
○二十一日報恩の後城内の(を)を巡りて歩を費す
遺書あり能く能く思を以て充つ、三尺小演
劇と関する内外の玉石新也、清劇の国者ゝ近利
ゝの知ゝ者ゝ者ゝ田村の著に後歌舞
伎年表八巻大御宮の乙抄ゝ上巻出版下巻を
出さゝ内原稿ゝ大ゝ、ゝ出版ゝ
べきことゝ、これゝ前人の編纂し年表後

[illegible]ら最近に動きまむを[illegible]
[illegible]を漸やく[illegible]を[illegible]
べし、市川團十郎(五代目)一代の演藝の
[illegible]を集めて一冊とし[illegible]
北方[illegible]はまくと團十郎の家に[illegible]
[illegible]を後世[illegible]
すべて震災に亡ひうせ[illegible]
[illegible]るの如きものこそ、之れを[illegible]
遺とせこ團十郎の役を評論す、市[illegible]云く余
は此の冊子の跋文を書けと請ふて一言を[illegible]
[illegible]が、團十の藝は其の形と其の眼に生きて
此團を[illegible]るの、此の二長を[illegible]思へ[illegible]

[illegible]の役を[illegible]
[illegible]を守[illegible]
て成ひし[illegible]
[illegible]を保ちうるの他に[illegible]
方優れ[illegible]と思ひ、團十郎の藝
[illegible]しかこと[illegible]と觀客を[illegible]
[illegible]き一種特有の天稟の[illegible]
[illegible]は近業として日本演劇の[illegible]
との志ありて、近年其の材料を蒐集し漸やく積む
も略ぼ其[illegible]を[illegible]
示さん、日本の演劇の[illegible]
し来れることを[illegible]の根[illegible]

さんなり、如何なる多数の舞台を見ても代順のあつめて
其の変遷の次序を繹ぬんバ、ちを明瞭ること〳〵
瞭かならざるあり、ある時代まれんに舞台の上に表ら
す破風の屋根を有し、橋がくりも能義を
倣いたるが、能義者の背景にひとしきものハ彼
風の屋根の背後に画かれ、多くハ松や樹の図を
一見無意味の装飾の如くに見ゆれども能義
者の背景にの倣ふこと絶えなし、又副場入れ
の橋の上の毛鞠の鈴を実本も三ツなることきも亦
能義者の外部の装置に倣ひたるまもなきなる
義者の変遷に就て見るに上方の方江戸に比して
すくの進化したる形跡なり、拉の中間の三間と極

まりなる漸やく狭きを感じ、たゞに前千延長する
変遷もあり、又前面もつきを出して中央橋をしたる変
遷もあり、左右に羅の大道をを置き架橋の背景
をもとるもの、能楽者の左側の今ハ里常をかけも能優の傍に出入する
道とするもの、一種の桟敷ありて、うんと下等の観
客ツンボ桟敷用に、席を占めたる図あり、うんを
羅漢基とも言ひたるハ、ここに存する支の風来より
釣くれつゝあるこゝろ、北斎の図に北の羅漢を例
面らし見るこゝろ、多くの芝居図に北の羅漢を
あるものゝ之れを見る能ハざる者、そこに北の変
遷あり、北の右風の清剛の変遷ハ、ちうろうなれば

[illegible]と異味あることなれど歴史的能楽として原来なる
ことを語る、伝えつらくおもうべし日本こと程その多
き形式のあるを敢て妨けさんとする式ケ和かハ能の
花風の模式を異する劇情を仏ん[illegible]と甚
だ面白きことなれ、身振めて執味あること、思
ハる、こんを多くの古なるものの面と見るその自
分の偶感なり、古なる迦ハ高ほ多くの源世絵を見
して示さんとする面なるおもしろく感じるい演劇・閑
する変化とあぶ絵式の能像図なるし、雙方を
共数三十種のあつて、振る意匠を潜ることの
なるかなるく[illegible]閑の面と成り徳川末期二十年
的況初年に海[illegible]つて此る盛に生ずると見く

とう、あぶる絵といふこの源世絵の一種として人の注
目を惹きし事、これを研究することのすこぶる必
要なる能楽の上と此のあぶる絵の実体あることな
多くの人未だ注意せざる振りなれ、古遠が拙し
能集なる芝居絵を見るに、始人目を拾ふる
能像の脚部或ハ股または半裸
体をあらハしたるものなり、此等ハ多く荒
かき能像の姿を抄したることく隨
分深意なるかなるし、所謂るあぶる絵といふ
[illegible]源、[illegible]源
[illegible]能楽[illegible]源なるかれを思
ハるし、却て其の本源を開却し人の能[illegible]注

言世さるの何かと、徳川末期の無世涙劇に性
質をそなへ、殊に目立てる殊丈美丈亂れ方
なるに、ふくも凡紀の〔欧律〕丈を用ひし不問に附
しなるなりと怪まるる視方
坐いろくの版書とそれ具つ話し多くの時間と費
し千年の響を受け、千後もりつゞき結書と
富目しなが特に注意を惹いたのは其反義
塾と教鞭を執りしことのある一外国人カー
ソンが著つしたる日本といふ著述であつたから、
こんなハーンの較べると観察が甚だ皮相な
るとを是に対して又仏蘭西日本書と考
証を附した出版物が後に外国人から来る其為

の一標本とも云ふべき大冊が出版に横つてゐ
た、その挿絵をハグツテ見ると、多くは正確混
合してあるのは驚嘆せざるを得ぬ、西洋人の著述
する者にコンなことのあるのは免かれぬ、書の
元拵選擇がよろしきを得ないとすると我書の
の現を寧ろ錯覚の感がする、カーソン
の一知半解の日本版である、保し日本
人が西洋を知らしむる西洋書を知ゝ
を役の四人が見たる六法日本の感があるひあらう、
最後に手に觸れた一冊は黒田源流が著つし
た西洋の影響を受けたる日本書と云ふ
一書であつた、これは日本の浮世絵のもとい浮絵

まあるとして、其の海路を早く書いたこと奥村政信で
あるが、其頃西洋修行日本に来て居る長崎奉行西澤
の流れを汲んでおるが、こんな日枝西洋修行を重複見れ
と思ひたい時代に属する、其の感化もとこから伺のよ
つたいあると云ふ付き、此の著者の云ふ不知支那
を源として未だ西洋感化の間接の影響響もある
といふのが里田の主張である、如何にも清朝の初めから
支那といろくの西洋人が輸入せられ、支那西が西洋
風にうつること甚だ難い、時代が高く今日上
から、原因を見ては物するのも一度考ふ所がある、古
後を問ふ後を問ふ後を問ふ後を深山に来たから
立場を感化を受けたのうつること甚だもろのが古る

くはい天保支那を源として間接の感化で出ると見る
の外いろへ、ろ〳〵西洋の感化ともう如きもろ浮世絵
が後年西洋人に喜ばれ、そんで初めて浮世絵の
都價が高まつたとい、ふのも考くて見れば深い因
縁のあるものである
直接定て五時写もろう程のものを海猫と大
吸をおるとサット赤のことである（八月廿一日記）
因に里田源次の著述中長崎絵の種類の部に
版元から左の如く列挙してあるも、そんな多のの
特徴があるとしてある

一 鈴屋版　二 高島屋版
三 文錦堂版　四 大和屋版

道路是れ産業なり

日本石油株式會社
専務取締役　津下紋太郎

優良なる道路が都市の美觀を添へ、市民の生活を快適ならしめ、其の衞生を助くる上に必要なる事はいふ迄も無いが、姑らく是等の事は措いて問はぬとして、道路そのものが直ちに重要なる生産事業である。何故に道路が産業であるか。以下少しく之れを語らう。

今、東京市の實狀に就て見るに、最近市内の自動車は一萬臺と概算せられる。此自動車が一ヶ月一臺平均五瓩のガソリンを消費するとして、全體にて五萬瓩である。之れが道路の惡い爲めに幾千のガソリンを無用に費やして居るかといふに、大體一割五分と見積ることが出來る。假りに一瓩のガソリン九圓として、五萬瓩の一割五分即ち七千五百瓩の代金六萬七千五百圓は、惡路の爲めに毎月無用に費されて居るのである。之れが一ヶ年にて八十餘萬圓の巨額に達する。

此のガソリン代の外、タイヤが惡路の爲め一臺一ヶ年に少なくとも百圓は餘計にかかる。即ち一萬臺にて百萬圓である。機械の修繕費は道路の劣惡なるが爲に普通の場合に比し二割方多くを要し、其額一臺八十圓、一萬臺にて八十萬圓である。即ち

ガソリンの損失　約八十萬圓
タイヤの損傷　約百萬圓

機械の損傷　約八十萬圓

合計　約二百六十萬圓

△

が、今日東京市の道路の劣惡なるが爲めに、一萬臺の自動車の持主の蒙りつゝある損害である。しかも東京市の自動車はいつ迄も一萬臺程度に止まるものでは無い。近き將來に二萬臺となり、三萬臺となり、五萬臺ともならう。其の臺數の增加に伴ひ、上記の損害も亦累進する譯で、世界的惡道路の根本的に改められざる限り、年々歲々巨額の金は、何ものゝ爲にもならずに空しく霧消されて行く外は無いのである。

—道路は其の産業を是れ—

更に進んで東京市の惡路の貨物運輸の上に及ぼす結果を考察しやう。先づ我々石油業者の立場より見るに、毎月市內各方面に運搬する揮發油、機械油其他の石油類を併せ約十萬函であるが、之に對する運賃は一函平均三十錢、全體にて三萬圓である。此の運賃は上述の惡道路に本づく揮發油の損失、タイヤ及機械の損傷其他に依りかなり高いものに附いて居るので、若し道路が改良せられたならば一函に付十五錢は輕減される。卽ち一ヶ月の運搬數量たる十萬函にて一萬五千圓、一ヶ年の數量百二十萬函にて十八萬圓となる。百二十萬圓卽ち僅に四萬噸の貨物の運賃に於て一ヶ年十八萬圓の利益があるとすれば、良路と惡路の齎らす損益の差は洵に驚くべきものありと謂はねばならぬ。

今、鐵道及船舶に依り東京市を出入する貨物の數量を見るに、一ヶ年一千萬噸を下らぬ。卽ち前述石油類の市內運輸數量たる四萬噸の二百五十倍に當る數量であるが、之れが道路の改良に依り、石油類の運賃の輕減せらるゝと同じ程度に其の運賃の輕減せらるゝものとすれば、十八萬圓の二百五十倍、卽ち四千五百萬圓といふ巨額の利益が茲に生れて來る勘定である。此の四千五百萬圓は今日に於ては劣惡なる道路の爲め全く無益に支拂はれつゝある運賃であつて、其れは當然生產及び供給原價の中に加へられ、一般消費者をして彌やが上にも物價の騰貴を嘆せしむる結果を招致しつゝあるのである。

然らば東京市の道路は其の幾何を改良すればよいかといふに、大體百萬坪の優良なる道路を鋪設すれば、前述の貨物道路を改善することが出來る。此の百萬坪の

道路を、最も低廉にして最も耐久力に富むアスファルト鋪道とするには、其の工費假りに一坪三十五圓として、全體にて三千五百萬圓を要する。三千五百萬圓の金は經費多端の東京市としては少ない金といふことは出來ぬ。併しながら單に貨物の運賃のみに就ていふも、此の道路改良に依つて一ヶ年四千五百萬圓の利益が得られるのである。卽ち鋪道築造の費用は最初の一ヶ年に於て優に之を償ふて尙ほ幾何かを剩し得るのである。凡そ今日種々の營業ありといへども、一ヶ年十割以上の利益を擧げ得る有利の事業は、恐らく他に匹儔を見まい。本論の冒頭に於て、道路是れ産業なりと言つた理由も自ら之れにて了解されやう。

茲に殘る問題は此の三千五百萬圓の道路築造費を如何にすべきかといふことである。しかし之れが他の贅澤の事業、或は不急の事業といふことならば、大に考慮を要するであらうけれども、道路の如き、今日之を築いて明日より直に市民の生活に利益を與ふべき有利の産業に對しては、何人も之に資金を投ずるに躊躇することあるまい。市は之に對して市債を募集し、國家は之を補助して、直ちに其の改善に着手すべきである。而して其の財源の償還に備ふる爲には、其の年限に應じ一定の率を設けて、運送の貨物に對し噸稅を課するがよい。或は此の百萬坪の鋪道築造に依り一般乘用自動車も多大の惠澤を得るとであるから、米國多數の州に行はれつゝある如く、乘用貨物用を通じ自動車用揮發油幾何に付幾何といふ稅を定めて之を徵するもよからう。是等の稅金は、今日の惡道路に依り自動車の蒙りつゝある損害、並に一般貨物輸送上の驚くべき高價なる運賃に比すれば、極めて少額なるものであるから、勿論何人も喜んで之れを負擔することゝ思ふ。

以上は道路改良が生産事業として如何に有利なるものなるかを概說せるに過ぎぬ。其他靴、下駄の消耗を減じ、衣服及び携帶品の汚損を少なくする等の零細なる利益も、之れを多人數に及ぼせば蓋し少なからぬ數字を示すであらう。若し夫れ優良なる道路が市民の精神上、健康上に及ぼす良果に就いては、改めて茲に絮說するを須ゐぬ。

米國に於ては優良なる道路と惡しき道路との差は、一哩に付乘用車一仙半、貨物車二仙と見積られて居る。此の計算よりして昨一九二三年に於て、優良なる道路は農業者に三億弗、其他に四億五千萬弗、卽ち全米國民に七億五千萬弗の費用を節減せしむるを得たといふ。米國に比すれば殆んど『道路なし』といふも不可なき我國に於て、ひとり東京市のみならず、全國に亘り道路の根本的改良が行はれたならば、之れに依り國民全體の利する所幾何額に及ぶか、恐らく何人も想像の及ばざる所であらう。

一材料の割愛を惜しむ為めアラズしかるの記事あるい茂の大きと切つて小さくしむるの嫌ひあり素世凱の記事と三〜光の賛材あり刪るべからず

一茂の議会を指て反茂のお手とする議会の名ことき失敬あるが似たるの如き的記を欲せず、如斯ハ＊を入れて章末其名を附すべし速記録のごときも章末に某議会何月何の某施速記録参照と録し大略を本傳に収むべし、雑誌ろ出る茂の言説ハ其出所を本傳中某雑誌何年何月号と録すべし、＊を施して章末に出所を録すべし

すべて本文に収めて参考を感するものハ記例に擬すべし

一茂の郎位大典に臨める記事の前提と茂と皇室との関係を叙するハ俗ろと詳且つ細に全く、此の長き記事ハ国民後者に強き感を引きおこす物なれ其他の高尚の事と分置掛排すべし

一茂の政況生活一日の記事中、何時何なるあき何時此を喫飯、休憩某時某所に行くと飯ろデテールに渉るものハ除くべし

一大浦一末の事人を引てあり渉に入るハ失礼ろ回りとなることきハ露骨とまく大浦ろハ

失礼なれども一本を同一筆法を以て綴ること
ハ不可なり

一 某々等の等の字を「ら」と書くハ略字のもじ
なれども「等」とまんべんなく「ら」と読まず
隨て音調なりしこうさんどい音調を主とする
ようなる本書なれども文法等としてハ
戻の翻子信書を写すこと書くべし
仮名、戻の就感すること一度の敬語を用ひて
のち名を云ハ今翻とのみ書くべし

一 文章荘重を要する所ハ特に簡潔の筆を
把るべし、即住或の辺ハ此筆段を要す

一 戻の組織なる内閣を称する相内外訪新

の内、例ハ小なる拙作や参考なき紀者の名
なるハ略して往ハ(へ)べし

一 要するに十二冊一冊のうちを文合縮めて約ハ
冊となさば冗漫の氣分を去るを得ん

尚紫水と事実の上に誤謬を正しなるこの二三の上
まるべし

今日の会の重要なる決定ハ前日録せしごとく、業者
の一人相馬の幸稽全成政治を要するに一度初行程
ようなるを機とし、相馬高須等と一度懇を解くことを
定し、改めて高須をも相馬の行を改心せしめん日
為め高須の懇をも解くこと

北会の席上中座の高らに表するる我輩の

と一二羽しめうるべき実況あり

光房夫人和歌を学ばんとて折ふしの
鈴木重嶺と松浦八十三仲子とおくゝ参庭す
るに機嫌の女主おくらし時候
の部く何候しく折柄とて動もすれハ三仲子とお
くらの鉢合せをなすことあり、北面婦人ハ日時
牧務をなすこと有る紀念なるもの一方ハ何
なるこの方を上席をなす一方をお出入の婦とし
一席を隔てなすこと、おくらし
ハ思ひかけき）ハメを隔て、ある時何か三仲子と
言いかゝりなる、三仲子ハ若しのことを言ひな
さんとて一喝しなるおくらも一言なるべし

とか
光房夫人が一時毛織編みを没頭さんしことあ
りとか、その譯をもつて鍋島房夫人を外国
の花留中、外国貴夫人の為すを倣ひたきな
毛織をなすを日常の仕事とせられるを、伯爵
後外国貴婦人ハ切くあるを知られたるを志
房夫人も買ひすゝ乳を如のうえなるとくその頃
ハ当のことゝ毛織ハ市中と響きたらさり
しなり、鍋島家ゝ実許を得ると共の
料ゝ光房夫人と、日本の毛織編の歴史
まハ綾子夫人（元祖の方なる）
古山の侯の配春子夫人の生母ハ何人なるやと（き

こんまで其の物語りをしたことを書きとめて、中略
かれら未亡人に変き浮名の事と擬へハ生母ハ後妻
ゝなる大工の娘なり、元慶の母堂に仕へ居りしなり、
明治の初年元慶母堂を失ひて伊勢侯に申めし
なる時ハ綾子なる人ハ八日位なるべし、年の如て
此時なり、其懐妊のなるを知られ未亡人なる故
お前の子なるべしと云いんと欲ス他の兩側の
知るべしと辞退し、後已ちなる夫人と知ら
せと結果三枝氏の籍に入ることなる生れる
とせこと大隈侯なりと元もなるなるなり
○今年八一月なる立帳一冊書の七来る、前年
耶馬渓を訪ひ、おりの自称和歌九章

認めあり、此和歌を略なるべしめしなるべしこ
れを収めおく

八月廿日記

やまくにのかはのくまわにたつきりの
　われにこふれかゆゑ又えて
よしにきてあしにてふるあかつきの
　こぬんーつめんくれなるなり
ひとえ子ゝよりしるもちりはすて
　ーくるゝやまをいとゝ又ふかな
ーくるゝやまをしるれはこころさく
　ぬれとまるへくおもはるゝ

あさきゝおいゆくやまのいはゝをを
つゝみもあへぬこのはなるらん
あきさらはやまゝゝうはのもみぢはの
いろにういてむわんまちかてに
やまくれのうはのせさらぬくちきうの
ゆちかつりつゝみもよりもかも
ーくんあるやまゝゝれうはあれにまきう
ゆふうるまひとうついて申
むうをのすきのはうをぬきもとて
ちいろのいはにうとかゝすゝ

○相馬流神相秘鑑といふ人相を説いたる書、交接の死の

先駈ひある、人万の気あかこんう衰へ故にその時ハ
悲観のお貌を呈するのひあると云てみる、動物も同じ
ことにて馬や驢か交尾の時ゝ絶てを考へて必死
の態度とする、そこび和会あ強の探索をあゝ、宋の
張耆ハ共姫喜の宮を馬厩に向て投け、馬の交尾す
るを縱觀せしめ、彩くて妃を婦て豆いて御しに
のび孕まゝるゝ（四十二）の吻を得ると伝ふ、…支
那ひハ貴ゝる方御者ハ驢ゝ使の動物を粥を飼すの
具とせ、別天武伝と云ふ驢ゝ愛さんに驢所ちゝ子ども
もある、驢ゝ接ゝ云ふ云ふ武伝が立ち
の抱擁ゝ云ふことハ別天外伝ゝ出て、みる

○大隈先侯の倚を編纂して偶感一二則を考へる

侯は五十歳軍位まで寡言沈黙の人なりその以後を考
ふるに口の人となり、前半は言のすくなく行ひ、後半は行必
ず言葉あり、前半の性格は圭角多く人を容れず、後
半は円満なる人を容るゝ、前半は敵多くして後半は
敵少なし、前半は改革一方の人なりて後半はあらゆる方
面の人なり、侯は[illegible]は有體にいへば前半生は未だ許すべ
き人物を以てすべからず、後半に於て始めて大人物を
以て許すを得べし、侯の前半は多く人の誤解を受
け後半は誤解を招くが為時勢の如くしてある
所もあれども、侯の性格の光輝なるは、其の卓越の
言論なり、其の識見なるも伝へん、侯もまた
不幸四十年以台を張らざれば、或は誤解の為に暴ら

んとするやも知るべからず、侯は薩摩の国勢力の間に処在して常に
腹背に敵を受けたり、侯の英才は自然其至剛に重きを
置くなれども、其丈多くの敵を作りたり、侯自信力厚
く自から是なりと信ずれば遠慮を省みざるし、
人も亦敵を作る所以なり、侯は当時種々の誤解を
受けたり、甚しきは乱臣賊子とまで云はれたり、実は斯
のごとく奏張するあるさんば、侯と甚関係なく行く
ること能はざるし、薩摩が英を排擯するを
事陰険の手段を取りたり、君主の英を排するを
素のごとくなる時は誤解誣以て聴めを掩ひ奉る
事、薩摩に限らず相和して侯のをる方
誤解誣しなり自国藩の侯を誤解せるごとき其一例なり

當時の侯を云ふ人の曰く、侯は切んとするも尚德の人
なり、侯は[illegible]道なるべきことを以て巨利を占め豪奢
を極む曰く侯の徳韓を伴に對する態度は極めて暖
昧なり、曰く侯の学校を起しなるは叛逆の徒を養成
するなりと、衆口は金を鑠す政治十四年
桂冠侯の侯に對する論評は大體に於て侯に不利なる
ものの甚だ少からざりし、北條の侯を晩年の如く徒に
なさりしは故れ、是も自家の為の辯する不無りし、然し
侯なりと十四五年の交に遠近しなりとせんべ世人は為
に侯を解せ[illegible]いたん歟、かるも侯を弱疏す
ることは容易なるべきなりしと想像せざる能はず、侯は自
からの立場を自から説明せずして徒に歴史

公刊の新聞紙に掲載するのみなる薩長出身者及び彼の政治家の輩に成る私信
のことをきは侯を侯に對する不利なる材料なりとし、
ないなし、餘りに北等を材料として侯の為を立てんと
するものなりとせんば、出でて黒白顛倒の大罪人と
なる可らざる也、されこそ、[illegible]
時を得さんば甚き不幸あることを思はざる能はざる
也、されども石田三成の為を後に更に柳沢家
の為を謀り、殊に北國を深くせるを得さるなり、石
柳二家は稚を蔵みの後と雖も容易に完を雪ぐを
得ざるしなり、自信ある政治家の行為の誤解

を惹き起すハ古今其撰を一にし、大隈侯亦其性格に於て
石柳二家に似たるあり、生前既に逸誣を受け身死の
世林 器量是非の論あり、七五に於て石柳二家に甚し
きものあり、其の死後に於て誤解を一段大きくすることも
しとせんや、但此幸に侯を長壽を保ち晩年の為す
所ハ多く国民の輿望に副ひ、往年の冤を雪くに大な
る力をなすに、換言すれバ侯の政治起身以来の言動ハ
一貫して常に其の主義を変ぜず、而して勉年に亦
殊に其の発揮を見るに既往を解釈して餘りあ
るハ侯の幸と為すべし且つ晩年の侯ハ寡黙を破
り、其の主張ハ鮮明に出白され、そんこう既往を説明
するもの少からず、侯を誣んとする賢々者流に最

早其毒牙を用ゐるの事ありしの如く、侯ハ世常に
屈く云ん流説の妨害を受けて事ハ時成就こもり
す失敗を以て終ればと、是が為紀し
侯を重大なる事ハ皆その後成りなるを以思ハ敢
て遺憾なしとせず、侯を嫉むものの百方侯を排擯し功の侯
の帰党ことを恐れんとせんとす、創始発業の功ハ奪ひんとする
も然ハすれ、侯ハ最も早く国会の開設を策し十四年の改変
変に起りたれども、侯ハ憲法政治に終始忠誠なりしこと
ハ他に決して疑ひなきを見す、一時の権略を以て国会開設を
策しなりと為す賢々者流果して何人の面目かあるや
是れ侯が長寿を保ち晩年を遺憾なく発揮するの時日年月を有しなんことを終始一貫

の實を現はし得ざるを、政治家に要するは長壽なり又難
き事なり、之れ往々不幸を產むことあれども侯に於ては
幸なりし、侯の後半生の傳は、日本政治家傳中に其比
を見ざるの傳なり、侯のあるあることは言説あり、而して其
言説は時を刺書に據て儀礼を存す、侯の傳の一部
其の言説を以て充つるものなれば、なり自叙
傳の体を為すものは西洋政治家の傳に其比傳を
求むべきも、英政治家の傳には寄つて見る能はざる
侯の傳の特徴と侯の誇りとする所は、英と云ふ謂
ばかりなれども、英の誇りとするも亦茲に立る歟、英人英
の為は四五年壽を長くせんとの望みを持ち、長也、稍も
既の時を得ざるを感せざるを得ざる也　八月廿五日記

埼玉郡忍の人耕石と嘱し[illegible]の印一顆を
顛倒する没刻漸やく[illegible]を得
印人動もすれば此の誤りあり、耕石の
自白に云く、[illegible]
と一笑
関防の意味日月徒に去り易し Time is short と同
じかるべし

○余の山陽遺事の録原稿略々成り標題の名を撰
ぶに困しむ隨筆と呼ぶも内容と違ひ山陽
遺事と隨筆とを呼ぶも時代の味に投ぜず、思
こ困つて隨筆頼山陽と標題をつけむ　八月朱

○耕石の淡こ云く中井敬斎の漢印を学ひて思へらく、漢
印の妙は字画の趣にあり、而して之れを風化作
用のあらしむる所の為すところ、漢印に倣
ふの念を断つに、之れ一理無きにあらず、況んや廉
爛の意、趣味なほ其の趣に倣ふ可きものあり
中村蘭台の主張と方く

○耕石と拓次印人奥山金到の事に及ぶ、耕石一族
を伴ふ、奥山をもと下館藩（一万石）の家老にして、
維新の際藩井龍之に説くこと再、奥山用淡中ちうとして藩論を決し
遂に徳川氏に訪すべしと勧む、藩論を家老の如

る故を以て客人を待つこと甚だ慇懃なり、延て亦
一等の室に入らしむ、時を経て奥山訪ひ来る、藤
井を年壮禮節を解せず、奥山の入り来るを見
るや敢て意を懷ず傲慢の態をなす、
奥山之れを視て直つに坐に就かしめ問ふ、藤
井後に氣つきなれども分疏を為すを欲せず終
に今をすると云る、後年奥山印果に立つて生活
を営む、藤井、金到則ち下僕の四家を訪ふこと
を知らず、印刻を嚇怒として訪ひ、其人に会す
れば何を問ふ、施設に訪ひまうるる事
に就こうるを主とするなり其人とは元藤井
の直弟なり

○光来春書を飲るを待を動かすこと無し、但此間
書を読もを迎人で往る時を待し得さるこのあり、
文八書ふ〇大なる力ある事歟
○昨秋早大出版部の特部紅葉館を決す、乃ち新株未拂込二十五円を一時拂込ふる
ことなり、出版部の業務は事業のとなる資金を
要するあらさるも、近年の状況三割配当を
継続のし得る勢あり、然るに三割の配当は往
其方面の嫉妬を買ふ憂あるのみ、課税の幸
を為ある所利益あり、利益を二割配当に引下げん
とするの資本を増額するの外に道なし、今二
十五円を拂込もるべ八部株金部にて十萬円を

富士登山

大正十三年七月

源寛可稿

山北驛を過て

山北を涼しく過ぐる村雨はかふつくロより飯しかりけり

御殿場

雨雲に腰より上を包ませて裾野をぬらす不二の村雨

須走の宿に夢を明て

水無月の暑さわすれて須走に凉しく夢の鳴く

廿七日午前三時登山を始む

朝まだき淺間の宮に身をきして駒乘り出す不二の山道

野羽玉の闇路彼りてゆくりなく人影かすに黒つくみかな

馬返し

馬返し馬は返さず峰近く手綱進むる不二の山道

三合目天漸く明へ

あかねさす朝日のほれり大空にへれなるほ不二の峰山

さも知らぬかりを立てゆかしへも百合花へ不二の山道

花はさかりは歌ひて音に聞へ遠かり島もかへやあるらむ

五合目に登り昨年の震災當時のむら雲を見ろ

大空に物とむらかり八雲立ち八重つへる不二の白雲

六合目天地の境を超えて天上の人となる

身軽も知らず登りてしつの間に我はなりけり雲の上人

七合五勺目（一萬一千尺）

池のこと雪かきわけてあゝまゆへ胸に水飲ま不二の山道

八合目庇に腰を返す

胸苦しうもひけあゝまつゝやゆきつ不二の山道

九合目雲霧を稀となる

頂近へ見えつゝ登れて足はかとゆ不二の山道

頂上にて雨に遭ふ

○案頭こゝ高ひこむ多くの郵

むの雨、知人らも過ぎ渡

せまるゝ夕のあゝ夜の寂

こ華まる思ひすい愛こ收

めて休れの資とするとい

か

八月廿七日驟雨

一ろ の後

頂上にて俄然雷雨に遭ふ

はたゝ神鳴近く鳴りて物すごく霰たはしる不二のいたゝき

聖ヒルモの怪火

高白きほのほも見えて目のあたり稲妻光る不二の頂

剣ケ峰より怪火口を望む

聳え立つ剣の峰ゆ見さくれは身の毛いよ立つ不二のほら穴

六根清淨（頂上海拔一三二六五尺）

六つの根はきよらになりて人皆の罪なく見ゆる不二の神山

鶴路御殿場口の砂走り

砂走りほき路きはことしゝより突落とさるゝ心ちこそすれ

たゞ板をすゝりすゝりて疲れても留るよしなき砂走りかな

足早にすゝりて疲れても留るよしなき砂走りかな

要す、幸に出版部に於て其銀行に十萬圓の預け金あり南分引出すことを要せざるべからざれば、銀行の諒解を得て之れを抵保に十萬圓の金を借入れ、之れを以て拂込を畢るべし、但し出版部は十萬圓に對し、當然相南の預け金利子を收得せざる可らざるべし、その利子は約六分として借り主より出版部に拂ひ出版部は銀行より出版の外、銀行に納もくし、然るして五ケ年間に各年の配當をいそ迄却まんは十萬の返金済をなすに株主は株金十萬のうち拂込を結了し得るべし、こん株主は其責任を負ふ方法也、昨夜内議の要旨を右のごとし、（廿七日記）

○七月の新文紙に永坂周二（石陳）の訃を傳ふ、石陳は森槐南海社の才人なりしが、最も絶句をよくす、久しく東京に住して醫を業とす、余坂口五郎の人に據り報ぜらるる命を刻す、先に郷里名古屋に病死して音問を絶つる久矣、新人實に七十餘歲にて不生なりと雖も詩壇一才を失ふ惜むべし

（二十七の録）

○内務（日本社史）を訪ひて石油政策を談す内務の説十一云く

我國の石油事業は從来の低業にして八地上著しく天然瓦斯の噴出甚しく石油露出の徴候

ある個所のみに其の程度の位置にあるものと
云う試掘を経今や進んで米国に於て盛んに
行はんとする Wild Cathing 即冒険的試掘
を行ふべき時代に入んとするが如し、米国に於て
近二ヶ年間に二億バレルの増油を見るに未だ
有の出来ざる新程度の試掘を施所に
敢行せる結果なるべく、蓋し是等の個
所に於ては石油の地表に露出して渾く地
底に埋蔵せらるるかあるいは亦また
バラ晨に峻出したる期日迄継続せざる可
を有す、今我国内に於て石油鑛区の登録
せらるる面積は実に十六億坪以上に及ぶ

後来之れが開掘に従事せんとする約を割に
きとす是(大沼氏の説)如きは
技術を以て米国に於ける如き試掘を別問題
行あるに於ては今後産油の増加期し待つべ
きものあらん、之を要するに我国に於ける
石油の業は寧ろ今日以後に於て大に発達
すべき運命を有することをいふべし
日本に於ける石油の産額は世界産額の千分の一
きず、今日の状況にては内地の需用を充するに足ら
ず、現に海軍の如きをアメリカ、英国の産を
仰て僅に其用を充たし居るも他国の産
は平時にこそ仰くを得べきも有事の日之れを奪

ほんとうに、平時に於てすら、甚だ危ぶまるゝ最中の事実あり、現に露脚が加州油田の産油一時減退の傾向を示せる際し、米国の石油業者は俄に輸出販売の殺約を決行し、価を引上げんとするも力め、新たに出期契約を結ぶ様締すること出来ざりしかの如き出油状況にあるも尚数年前を解かず出期の契約は依然国しるも尚数年前を解かず出期の契約は依然国難なり、平時如斯し、米国の産油と変化あり日本の輸出高大いに減じとなれば日本はもちんとする、日本は到底石油獨立の国策を立てざる可からず、而して内地産限りあり、南洋印度方面又出でて採掘を為すの企図をなさゝる

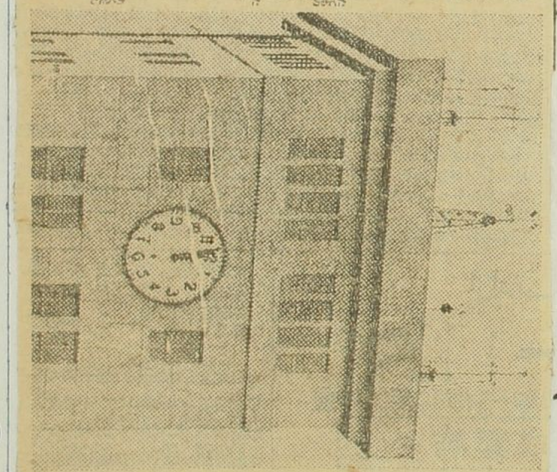
を得ず、勿論資本面の社主会社のもう得る所にあるべきなれば、或は宜敷私会国の会社を建てゝ之れを経営するを可とせんか、要へ国策の確立と共方法を決すべし

（二十七日記）

○此年大震災の一紀念として掲げおく

夕刊報知新聞

八月廿七日



○昨日書業中一袖の目録に一二の図を録す

一欽定武英殿聚珍版程式　二冊

乾隆帝聚珍版を印摺の時其の版式を定めたる一切のこと此の書中にあり、木活并に植字等の行程皆図あり、書史学上緊要の書なれども久しく得難きを惜む、容易に手を入らざるし、北方巻首に練士図を収む製本の際錯簡しやすき似たり

一姑射文庫　五冊

北方巻末の摂化なる句集を附す尾張の人、推敲

す、寛政九年湖月亭蹇湖の序あり、俳諧史中可なる者なり、のこるなく極めて稀なり、月推の俳書なるべくして稀なり

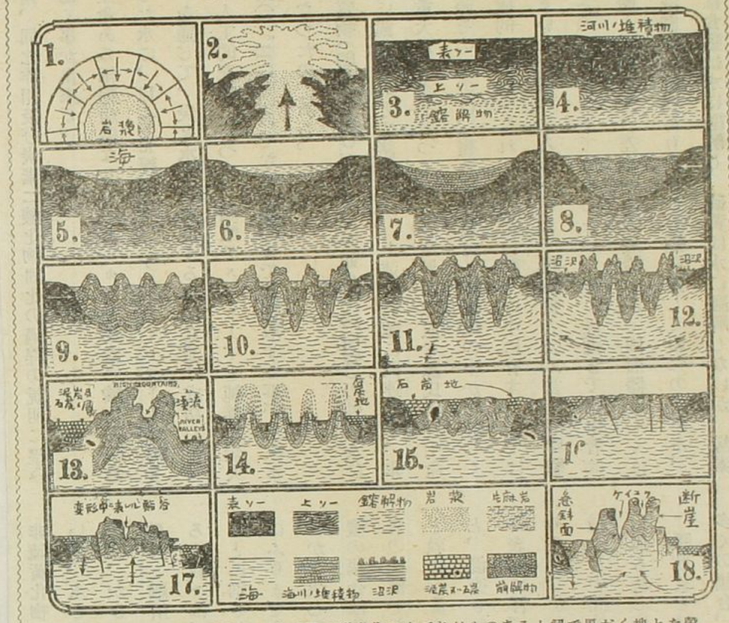
一沖瑞瑞文句　五冊

元文三年浪華に於て上梓する不九種の沖瑞瑞の雅解の俳諧なり、此の注を施しなり、北種の書の古なるべきものか、著者は西面の蘭皐と序にあり

○青弾文の大意　左の記すあり

八月廿九日録

山の出來る順



山や溪やつまり地殼凸凹の變化はどんな風にして出來たかといふやうなことは地文學によつて詳しく說かれる所であるが、その山がどんな風にして出來るものであるかを簡單に圖解を以て紹介すれば上圖の如きものになる譯である。(一)卽ちは岩漿にすぎぬ時の地球の最初を示すものであつて、その外殼が冷却するにつれ地球の重力によつて各部にその矣が示す如き力が作用するのである。(二)噴火岩石が起れば幾分の岩漿の上に落ちるわけであるが、これは地殼の厚さを無邊させて行く。(三)圖は幾分地殼が固定した後の構斷面である。(三)段々地殼の冷却につれて鑛縮が出來て水が流れ、從つて沈澱物を運んで低い鑛縮地に堆積してゆく。(五)—(八)段々、冷却して行くにつれて、低い地盤は次第にますます低くなつてゆき遂には全體が海に覆はれるにいたるがなほ沈澱物は堆積され遂には周圍の地の高さに同じ高さに至る迄に高められてゆく。その間外層の硬化しつゝ岩漿の壓力によつて漸くに硬化しつゝ原始的の岩を形づくるところである。(十一)浸蝕作用は山が風にして出來るものの作用が最も出す。而して遂には內部の熟のため柔かになつてゐる岩漿へまでその沈澱物は其重さの爲に達するまで下降する。つて行くうずとなる。ふと內部の岩漿は岩石層の保護を受けて剛い堆積層を見出して、その剛い堆積に絕えず力を働かしてゐる。(一)內部から作用が起れば幾分の岩漿に高まりが出來てつまり島をたすわけで段々海の外面に表れる。(一)これが段々海の外面に表れるその浸蝕作用を被り、その浸蝕された部分は山と山との間に堆積される。(一)內部よりの力の爲鑛は益々之を上の方へ押しあげられてゆく。この地が上の方へあげられるにつれて海水次第に山の如くなつて行く。山は岩漿に動の根の如く突き刺さつてゐるわけである。所が岩漿がこの力を働かせるのである(十)岩石の山の一部で岩漿が高まり硬化しつゝ原始的の岩を形づくるところである。(十一)浸蝕作用は山が全く、然し、重力の作用はやまず、今日の石炭なるものを堆積し炭なるものを多少礫つづかる。この浸蝕作用は外層を石に化せしめたりして段々水平にして行くのである。(十一)外層がく硬化してから氣流の變化などから、永い年月の間の裂罅が入るのである(十一)內部の溜解物は留落しつつある外部へ其重力を及ぼしこの兩者の力を平衡させるために一方は昇騰し他方は留落するといふ現象となる。(十一)陷落する方は脆い部分を持あげ樣とする。岩漿の一面を壓はなる。これは尖塔の如くに其周圍より高まり、而して再度現今あるが如くになる。

アメリカに建設中のピラミツト

現代文明の足跡を將來の時代の爲にアメリカでは最近大きな方尖碑の建設を計畫してゐるといふことである。その高さは百三十吋のもので、アルカンサスのオザルク山頂に目下具體的に進行中であるといふ。その任にあたる人はウイリアム・ハーヴエーといふ人で、氏は今より二千年たてば現在の文明はその影をひそめ、新しき民族が出現するであらうと考へてゐる相であるが、このハーヴエー氏の忠言は歷史に照して一笑に付することも出來ぬ。昔エジプトの賢者が、彼等の大文明も失はれる時が來ようと云つた時誰も相手にしなかつた相であるが、今の時代の人はこの文明がいつか亡びることは大抵想像するに難くないであらう。ところでアメリカに於けるこのピラミツトの建設は、二萬五千弗の費用で、目下着手中だといふが、その土臺ともなるところは四十呎平方で、十六呎平方位の石炭岩の上に直ぐにある室には多くの、天下一品といはれる絕品や、高價品、或は記錄といふものを保存しておくのだ相である。飛行機の圖、血液循環圖、鐵道、蓄音器、電氣、その他あらゆる近代の發明をこの寶庫におさめて密閉しておくといふのである。で、この密閉された室は三室あつて、一室は第一階ともいふべく、地上にすぐある所だが、他の二室は正六面體の如き第一階の上に建つピラミツトそのもののうちにあるわけである。

これが今から二萬年も立つて開かれたならどんなことだらうその時分には人間は今そこいらを飛んでゐる蠅の樣に、飛行機で飛びまはつて、ラヂオと電氣で世界中のことは何でもわかるといふ時代であらうとのことである。このピラミツトを開けた人は今の人たちの文明を笑ふだらうか、感心するだらうか。

○世間姑と婦の折合のむづかしさを說かさるるに、事實と指さる赤然、婦八他人なり、姑ら見れ八年の差きこれなり、他日のそれ代りて姑となるべきなり、一家こんなを大切なるこれなけんば、姑八おのれを打續きするに遺憾なきに、手厚く敬くいつくしみ、かりそめも虐げる樣のことあるべからざる器なれば、徒らに

んと交まる事あるに、其の性格の同しからざる因らん歟
[illegible]女心は[illegible]奪ふ者らしく思ふが故なる因らん、実
に而倒るゝ者多く、然るに[illegible]ん妙なる人の婦たる
事の一男子を生めば、其の即刻より他日婦人の家の女を納
るゝの覚悟無き能はず、老もまた小宣嘩の打手
となる他人の娘を、己が子の配偶として家に迎
る決心を辭す可らず

○青春期に雖きは他の来るべき老齢の
境遇と共に伴ふ観念なり、之れを又て青春の悦
ぶは青春の時は概ね自覚する能へずして老境に
入り初めて[illegible]之れを[illegible]
道程なり、悲哀[illegible]

[illegible]間なれば、而して死に近づくに最も痛切なる
のを感ず、死に[illegible]感ずこゝに悲哀の死ぬまむの感
[illegible]、骨[illegible]硬[illegible]丹[illegible]義[illegible]鈍く、氣力日振
はず、前程行つまり、望[illegible]
[illegible]勇を缺き、徒らに少壮の侮りを受く、老[illegible]悲哀
[illegible]感ずるは青春期の悲哀[illegible]外の[illegible]は年[illegible]
情んじ[illegible]きはあらず、死の悲哀いなに堪しは日々度る感
[illegible]ることの老者なり、唯だ此時愁を一掃するまで一杯
の酒あるのみ、詩人云、百金買駿馬千金買美人 萬金買
百壽何事買青春
然んども老人も自暴自棄を戒むべし、天壽は実に測りかたし
[illegible]六十にして死する者あり、八十にして尚ほ死せざる者あり、

まん年六十有五、若し七十まで死まずまん尚ほ五年
あり、若し七十五まで死すとすれば尚前途十年あり、五
年尚事を為すべし況人や十年をや、凡を徒再び
生をうこと程愚なるはあらず、春青春期まは遠大の
志を抱き二十年三十年まで之れを達することを力むべ
し漸々老ては唯九達成の期を縮めて之れを十年とし之
れを五年とし九年、無方針にて一日を費すは一日の損あ
り、天寿の自ら測り難きを強て臆測し最早事を為
すの前途なりとなすが如きは早計なり、自暴自棄は
先哲の一弊なり警めざるべからず　八月廿九日録

○左の短冊は日本中に人あり郵送こなあり歌
に落ち来りたるもの、残夢も猶ほ折ふし多の

の深味無きにあらずと雖ども敢ひあげてこゝ
に収む

○友人和田萬吉氏より梓に上せし字馬翠日
記を寄せ来る、天保二年の馬琴自筆の日記
一冊を校刊したるものなり、原書は高大義本にて
震火に烏有となる、此刊本偶ふるに足る、従来馬

琴の日記を刊行することあり、既に昨年刊行し終りぬ、一年分を全部刊行しおいこんが初めてなり、日常の瑣事を綴るに止めて思想上に及ばず、文章の如き優位なきこと、自他公認する所なり、唯だ一冊を言しなる労へ多とすべし、唯だ記憶の力を入るゝ、そのことのなるかを数ぬさるを得ざるい

八月三十日記

○恐怖の一週年（僅に）

○恐怖の一週年（僅に）四日を剩すのみ、追懐今昔戦栗の思あり、幸に余が家に火災を免かれ、余が関係の事業方面も災厄を免かれ、家は破損して今尚ほ修理を加へず、室内屋破れて見すぼらしき状態なれども、北木災に罹る者を思ひ

甚しきは家族を失ひ、或は其の幸福と財産を失ひ、自殺を企つるもの、或は災後一年間市中の復興（其の好況）を見るに、バラック建築の深川の果まで家の建てつゝけり、一年間の功程とも思はれ迅速成功と謂ひ得べきまへ、一時不充分を感じる各般の貨物も今を略々旧に復し、特に不自由を感ずるものなし、浙江の大災の後に疫病の流行が例るなれども、これも格別のことなし、建築の材料は一時本建築の興ることを豫防して、元低し、薬業もなるべく結果甚だ豊富なるに本建築偽に就うさるが為め一般に價低し、唯だ有きものは職人の賃銭なり、貧民は公設バラック

又熟考し
て事業の如きを為さんと欲するの
ず、之が為め所謂山後バラックは一年を経ずして撤回
し得たり、然れども人民は寧ろ天災の為め倦怠を
得るの状あり、誘導とよくこときを為んとするの
ものなる也、大災後餘震二十四回を数へ、今尚ほ毎
日二回乃至震あり、進て東都より漸次遠き
四囲東北に切なる強震あり、地震を傳ふるの火・焚
燼の慶茂始末未曾有のものなり、今尚全都庁付
かず、運搬力の甚だ微弱なるを立証し、自動
貨車は著しく増加したれども道路を狭くすること大なり、
道路修理の急を感ずるもの甚だ多し、道路の橋梁
の必要を痛切と数へらるるあり、北の一年間の内閣

の更迭三回の多きを及ぶ、大震災の四年山本内閣成り又
後不敬事件を作し、清浦内閣を以て解
散後の総選挙に敗を喫せんとして作る所の
ハガキ為替取引代いまこれを馬鹿の如し思
議一年を遡ればまた前感交を別る、以上八思ひ
出るまま災後の推移の大略を叙する事 八月
三十日記

○復興案なるも八月のころ配本を受けたる二冊の内一冊
ハ去る今月三日函館北国一論字」なる、北原本林義樹氏
なる二冊あり、之を復興案なりしと出羽秋後の記事
秋後新聞」のスクラップ誤こなし業者へ出羽なる秋後
入りなりと云へしく面白しと境の回あり是等や乙村乙寅

寺の図あり、乙寄寺地蔵菩薩の像安置あり、荒川の
風景図あり、城後婦人（魚を売る図農家の図あり、加
治川の図あり、松ケ崎の図あり、新潟の図あり、新潟の酒
楼海光屋久助出義の図二枚あり、新潟芸妓、并に新潟市街の地図
娼妓、杯盤の図あり日和山、并に弥彦の図
等あり、城後出身の画家茅場殊と無味と覚ふ、茅
場殊雪旦天保二年八月古書を陸奥出羽
後信濃上毛を商（歩）し九月十五日帰庵す、北の箱
八丈の旅中のスケッチとなる、此年雪旦四十三
歳

八月三十一日記

北図をもとに海光屋の出義のようなる壮大のものを
故に見る、此れもまた自分の海光屋箱の娼楼を記

す図中の注を見るに古川二ノ丁とあり、北楼を隔
て、今は見たまへ二軒の看板見る、他に其の
住宅を知るべし当図中の注に旅籠屋大家の部
中海光屋今は見る小島や高崎や志田屋秋田屋
山口屋車屋柳屋加賀屋を挙げ、当時旅籠屋
娼楼を兼ねたりと見えたり、海光屋の出義に掲げたる
額に酌婦のむさぼる瑞珠亭の額掲げあり、また
楼名なし、外に義湖の色紙の二枚額あり石
川侃雨の山水の画あり、聖なる酌婦の山水幅を掲
新潟義娼妓中考の風幸、髮容才字得て其
二通り、多分の解説を附し新潟の新聞に掲げ
くるも可なるべし、

信濃川流域の地震帶に就いて

（上）

佐々木新潟測候所長談

日本は有名の地震國であつて昨年の大震災は其中でも慘害の甚だしいものであるが其の發生は發生すべき當然の處から發生したものである大平洋に面した外側地震帶が

日本海に

面した內側地震帶に對して四五度の傾斜を持つて居るので恰も壁に龜裂が生じた如き狀態であるのである、安政元祿年間の大地震は外側地震帶に起つたもので、濃美大地震は局部的地震帶の三角形の處に起つたものである、信濃川地震帶も局部的のものであるから將來に於ても大震動が起るやうのことはあるまいと思はれる而して信濃川地震帶の主體は沖積層で從本、諏訪、犀川方面は川の沿岸のみであつて下流に至ると大部廣い區域が此の

沖積層で

居るのである、此の地震帶に起つた大なるものは善光寺大地震で弘化四年三月廿四日の午後八時頃大雷の如き音響と共に大地震を起し震區域は本縣の中頸城、荒川流域から松本、七山附近に亘る信濃川犀川に沿ひ百三十六方里に及び大烈震區域は飯山附近から南方面稻荷山附近と更科と水內郡に亘る延長十二、三里巾約二里積三十方里に亘して、死者は一二千名、全潰家屋三萬四千戸、半潰か三千四百餘戸に達し

本縣に於

ける被害は全潰か二百九十三戸、半潰か約一千戸、死者が百六十人であつた、震災の主なるは岩倉山の崩壞に依る犀川の堰塞で震後岩倉山は崩れて犀川に落ち高さ十八丈の大堰堤となつて約廿日間は水勢に抗して容易に破れず四月十三日午後五時頃南の山が又大鳴動を始めて數十丈の濁水は、大山の如くに流れて水嵩六丈、尺に及び從代の三十二ケ村に大水災を起し、六百廿七戸を流失した犀川大洪水の影響は下流の

信濃川に

及んで三條、見附、燕、今町、與板等では家屋の倒潰が多く、就中三條は全町總潰れとなつて死者四百人を出して

火災が起

り全町を燒き拂ひ慘狀を極めた、震災は午前八時ゴ震後約十五日間も餘震が多く激震區域は、三條附近を中心とした信濃川流域に沿へる狹長の稜形內で最震十二、三里短震約四里で震源地は北緯三七度二五、東經一三八度五六附近であらう、長岡は潰家が五十戸あつて震災が輕く新潟及海岸は殆別の被害がなかつた、損害は全潰九千八百〇八戸半潰七千二百七十六戸、傷者一千七百四十九人、死者一千四百四十三人、流失が一千二百四戸であつたが其後大正七年十一月十一日長野縣

大町地方

の地震で潰生が午後三時頃全潰家屋が六戸、半潰が二百八十五戸、死者が五人であつたが信濃川下流と內側地震帶との交叉點である

の城後ある北城の
新紙上城の地震
の沿革を掲ぐい
くらの現未ゆ

信濃川流域の地震帶に就いて（下）佐々木新潟測候所長談

併せ發し

過大に

局部的の

家屋は倒

より具体的に数字を示すことは
やりぬきを収めておく

○支那画を新らしく研究し出した人の説にいろいろ解釈がある、前人とても全く言のぬけたものが、新研究家のことく具体的に解釋的に言ふことが出来ないだ、左の説の如きは其の一端である

支那画の特徴は外界形似よりも寧ろ画家の心を表出する點にある、而して其表出の手段は暗示的にして現実的にあらず、支那画のは宣紙と云ひ墨筆と云ひ、材料は西洋画のに比して心安く安易なる材料を以て無限に画家の意を暗示する、寧ろ暗示的にして、画家とするのであるから画が出来ない場合を考へて、全く蓄積した経験の種々の観念を心に喚起して境外の物象を生ずる事を云ふのである此観念暗示は描線を其具と用ふるのである、之を心現の上より云へば描線による眼筋の運動若しくは運動の傾向を喚び起し之を動と生じ感覚を通じ次いで種々の感を生ずるのである、故に支那画の性質を知らんと欲ずれば先づ支那画に用ひられる描線の性質を其描線を生ずる心身状態を研究せねばならぬ、支那画の宇宙の素質を力と空間と時間とに解して研究すべき筆を力と空間と時間とを暗示し得て余りあるものであるから、其描法は線を以て力と空間と時間とを暗示し得て余りあるものであるから、其描法は天地人物の風韻を

画面に活躍せしめ得るのである

画を画を動かしめるのであるとも業の働きは眼筋をして画を動かしめて又せしむ、例へば画中に凝視すべき一点あるとせん、眼は之に集中するも、こんは其動きを知らず、而して凝視の点の周囲にあるものを眼の単動の仕方及其目の方向に動きしかのせき錯覚を生ずる、所謂生動といふべき地理と基くのである、凝視を要する主要の点多く画面に偏ける時は、極めて複雑なる錯覚を生ずる、立体の画にあるさるものは立体に及ぼす、遠近法に拠らざる手法の画が遠近あることなく又あるものとも所謂地理を生ずるのである、描像の実と支那画の特徴とあることが

之に就てもてある、

八月廿日記

○昨年の今日が大恐怖の日なり、大自然の脅威が心膜を突かるるかの如くに、全く無警察状態に陥り、鮮人の騒きが革命気分に混乱し、張らるる、叔の河の不安は言説に絶したり、此年は大恐怖の望のか二百十日の悪日なりしに、今日は二百十日の厄日に全く以て平穏、昨年の大厄を記念せんとて、満市謹慎の態度を取りしため、市街も死し居ることく形容を極め大厄の時刻十一時二十八分頃ともなれば煙花爆竹を以て形容を破り特に遊都の人々緊張を促し、昨年大厄の起りし殺那は大限分銀二名と事を議し、正さる食卓に就き居る時なりしが故に

会を終えたるは十時なりしが、昨年八月なりしに同じ人々と今
し、十一時五十八分なる汽車にて食堂に午餐を
共にし、当時の事を追懐し無量の感に打た
れつゝ、午後は市中の状況を視察せんと、浦崎行の電車
に乗り、神田を経て神田橋を渡り大手町を経て
日本橋区に出づ、市中引き続き往来の人少なく、商戸
の多くは鎖しあり、呉服橋の橋死者多かりしと傳
へらるゝが、橋畔なる大なる塔婆を植て香華を供しあ
るを見る、谷商店なる或は吊旗をなしてあるもあり、三
越呉服店は休業札を貼り、レヨウルームなる神を
装置したるなり、或墓を駢列してあるを見受けたり、
日本橋なるも更なる乗合自動車に接し、浅草へと向か

沿道静粛他と異なりさえとも漸やく既橋を横
手に望むあたりなる人衆雑踏多くは既橋方面に
向かうを見る、遠く望めば橋辺人をなして填つ、皆
な被服廠と引なるなり、北の被廠に赴きたるなる五
十萬人と傳ふ、廠北所なる追悼の式あり、内閣大臣始
め首相吊文を読む、余は雑踏の為め引り見る能
はず、直なる雷門に向かう、北辰七人衆雲霞のごとく
中庭の通路填塞、辛うして浅草の堂に上り観音
を参す、七時既に三時を過ぐ、四想へば昨年今日の
今頃は猛火全市を蔽ひて一大修羅場を現出しなる
時なり、七萬の亡者か被服廠に落命したるも一
二時間後のことなりしなるを想へば戦栗毛逆の感

を禁ずる論りす、亦乗会自動車と乗り牛人追引掛け
神楽坂を徒歩しんかへる、北日殺傷事件一あり昨
年来蔵前会宜なりし福田大将本郷に於て大杉栄
の典葬に短銃をうて狙撃せらる、幸に宣弾なりし為
無事を得たりといふ、　大正十三年九月一日録

○むかしの文人は俳諧を戯れと雅化し文嬉を戯ひとり
風雅なるもの俳諧を文人こそ雅化したるものなれ
山世に於ては故人なりしなれども才に乏し
なり、俳才と文才とを兼ねあるこのあるこそ
ハ出来かたし、中路接隠を持人と称さんし丈に北般
の機智を異し、流れの中の一瓢に一着を
翻しなと侍くなり、俳諧と雅俗と接隠

の一文句を録す、一日酒鋪の主人某氏接隠に題
歌をもとめ、接隠漢して直に「芭蕉庵」の三字を
書す、若しモチクワン、モチクワンと言相近きが
故に酒家の為めに敲手を排し居るなり、酒鋪の前
りに餅を売る家あり、北の額面の言を以て
つて接隠を誘る、接隠応じて郷を額を書
き與へんと直ちに芭蕉鶏軒と書す、これも又
俳諧を家しとするものなり、イケンと称家の
為めの酒を排し居る機智、亦言ひぬべし

九月二日記

○大隈侯の傳の末に文人の手に成る一冊の紀行を収めたりいふく材料を遺るに、然るに文人の手より一冊の紀行を出さんこれを収めたるのみと、示さるゝを見んば先侯が外務大臣時代に関西旅行の折、文人も同伴せる事あるに、岐阜辺を越えさえし折りのことと和文の記あり、十日ばかりの旅行なれば紀行の紙数果して十枚満てることあるべき筈なれども、傳中にかくるゝを惜しみ、紀行の中なるを折りて編入せの所謂あり、自分は未だ嘗て三枚子あるの内一度加筆せしことなくしてこれを文化の事もおもしろからざる不あり、之を原のかぶりを要

すとて、今年今年ハ二、首肯を四附し、其の
其一を記す　九月二の記
○昨年の大災後なること満一年間身を何方をし
ばかを追想して見るとまづ災後約四十日間ハ自宅の仮
修繕に没頭せるを得無つゝ、幸ひに火災を免かれし
が家屋ハ半潰んとせるべき状態にて、四壁ハ悉く落
ち屋根も半ばは落ち、浴室ハ潰れ、玄関と其れと連
絡する前面の二畳の間も崩潰しとのこ
とんを取拂ハ於のこるもの、周囲ハすべての柱が曲がり
廊下の天井の板ハ外れ、縁ハ曲るもだぶつして出
るくことも出来ぬと云ふ有様、別庭を家屋ハ改造
を要するものの大破なりしあるが様なを得て改造を

決し、差当り便所ハ仮作りとし、浴室とも主ハバラック
を建て、飯りの間ハ会ハ七、家のマガリハ四方大
二を曲げとし、玄関ハ手の型の後ろ、玄関ハ
他元山間しる建物の七畳を板を以て作るもの容易
なることで無つた、北等の修理ハ千五百円位さく
かゝらなかつたが、家が主屋しを要するまゝの破損
をしたが其損害を見積るハ三万円の上
る事ハ為ん事を見合せ別庭の別荘も可成
し捨てしが、元等も庭の修理を施し、玄関其
他土塀程の建物を取崩し、其前に巻き帯り四方の型
きを作かるる為十五坪の吉物と大隈屋敷の巻物あ
つけしが、運搬ハ自動貨車二台を要し、いろく

罹災であつた、此の混雑の際に自分のつとめとして北の稀
有の大震災大火災、震火の時の大混乱最後の事
をも可成委しく書き留めあつたと日誌を示さ
れも無信心者に記録し、尚使館録と地震記を為の
録して二三冊の本が出来た、実に机の置き場もない程
の紛乱の場合、ニンナ事を考るよう外へ無かつたか
らである、家屋倒壊の為に日々新聞の舎も無るの
に一時に銀行の拂出しも止まつて困つたから各方面
から見義の貸られた心金が千円ともあつたので
當座の事が万事ととのつて仕合せであつた、自分の関係
ある事業に陸海の災厄を免かれたが印刷会場の三
階工場が工事中で一階ものこつて崩潰した、之

んを復興することが差当り自分の責任であつて、震
災に際して他の為め保険的工事を要することを設
計のやり直しをなす苦心し、前らも堅牢に陥つ
た為めを要する工事に着手し、先が北浜義
成し以、隣つて一面の株主拂込を断行して、印刷用業
は山の手の二三を除けば続つぶれの結果、五社も
災後死亡者と為りして工場が狭隘をつげ、出
版部の変地内の会社の分工場を設け出版部丈
の仕事は北工場に集まるの法を書し、その工事と
取りかゝて、先ハまず出来るへが、これも北の姉乃
のもと属する、重患と罹つて死亡した友人坂口五峯は震
災後数月終に東京に歿した、四十年来の友誼

自分ハ主として葬儀のことを担当し、本葬儀を新潟と
営むに場合も特に帰国まもなくこれに臨み、死後のこ
と、殊に遺族出阪のことを斡旋したり、目今の
場合事業の内で最も大切であるのは大隈侯の
傳記編纂のことである、うんが幸で共尾と兄かん
で原稿一枚をも失はずして、随て編纂の進
渉ずく進んだ故、本年十月に印刷に取りかゝらねば
ならぬ段迄の運ひ、なるべく此の一年間督
勵に大努力をやつて、初稿四千頁程のものを淺
み且つ訂正を要する個所を指定するも方
ずいぶん力を入れたが幸いに大体全部初稿ハ去
月の末まで出来上り或る部分を四五度の推敲

者に回覧もしてもらはねばならぬ、文明協会の事業ハ
幸ひに奏奬前途楽を渡つた事務所の無難にあ
つたが、今年の多数殊に出資会員が特に共尾と羅
致者の減ずる事業の規模を半減したるも
することが出来たを得るかつたに、俗し出版事業ハ別に
規模を縮少するの止むを得ざるに至り、会員の度数を減じ
奏奬後援に関し科学の知識を流布する目的
を以つて毎月連続の講習会をひらき衆庶の
来聴を許し、需用要求利加問題に就ても特に識
者を煩して研究をなしひらき、(三)事の会も此
年の冬頃から常態に復してゐる、早稲田大学方
面ハ奏奬の上に大隈紀念堂建設の計画募集

し比宮附の申込の向百部程八部分徴集不一の紙
とゝう事業に一段拙を生しとかい自分の最も深く関
係して延びくとゝうもあり比図書館の新築丈を金
以結こゝと今ハ工事中である、こゝを自分として深
く満足するわけである、自分の主宰のもとある早大
出版部の事業も震災後此事の好況を呈し漸
都不景気に泣くの折柄三割の配当を為す事
ことを得且つ新株の拂込も決行し、ますく
好況にあり震災前と大略相を脱しこの余が随筆
類山陽の中庸ハ一気に印刷に附すべかりしを持重
して二三ヶ月書直しや補足に時を費し初稿を
大いに改め得た為くべきにもゝへかゝ今も自尚

補訂をつけてゐる、震災と全市の書籍が焼
失して二三ヶ月ハ全く自分の購書の習癖に停
頓を来しに今次の災厄に多くの貴重書の焼
失ことを考へると、図書の大切さを感ずること一層深
く、一旦ハ自家の習癖を改めんかと雖も容易に
書籍の復興が高の早く、殊に震切りも珍
籍も底頭に現ハるゝのを以て習癖を継続し
ハ十月九日の間に四回の郊外の図書を購ひ
倫ハ災前よりも昂騰したから買ひ
金がかゝるとい、概して社会も災後暴騰し、
家計上に支出も莫大であるから、別に負債
を起すことも無しに此の習癖をつけ得たのと

仕合とせねばならぬ、北の一年間に四回に二回帰省し此
度一回旅行の路路修業者に立寄のこと、皆地震氣分
を慰さん為めなりし

九月三日録

○大隈老侯の傳記編纂に就て携任執筆者が参考
の為と称して近年の諸政治家の傳を桂公の傳が
尤も多く出来て居るを云へば、自己もそうであるから、一方
前らも読み如何大體を海猟しつつ、桂公の事
跡の其自分のインテレストはるのが大隈侯傳を訂
正するを方りこんを他日山の名と併せんとして、ある、
此桂公の傳は上下二冊で各冊千二三百頁の大きいもの
で一冊の厚さが二寸以上もあり甚江取扱ひしくひしもの
であるが中に多くの古詩の言葉が挿入してあるから、

別して難渋する所がある、係しこん丈のものが二ヶ年
の出来上の大編纂者の努力の賜物なるに、徳富
蘇峰氏の名が罩してあるは、事実多くの業
者が分擔したとのことなれど、唯此蘇峰自身が古いと
と思ひこんでいくらかくるとこれを評論す
るあらひ、結言や最後の公の死生を叙したる
ものと蘇峰の業であるとう、文章は現代式ひ
やや硬い方である、尚潔で要を得てゐる、絶まひ
を中心として飽うまく背景を拡張せるの所は尚
である、侯を飽まで揚げるきぬ為めに蘇峰の注意
言であるとう、叙事が尚ひある割に頁数の多いの
は重大な事件に関係しなかつの事である、併

取り入れられた材料の内には桂公の筆に成る自傳がある、山縣其他先輩に寄せた書簡などがある。之れは此傳を書くに可なり便利を感じたのである。大体事蹟は多いが、径路は甚だ單調である。蘇峯自らが記して居る通り桂公は山縣伊藤の道を辿りつゝあるき、傳者の的興味が無いと云ふて居る、亦公の性格に就ても平凡の人で多くは平凡の事を行つて居る、と云ひ、理想も無いが實行家であると云ふてある。維新後十年頃から洋行後陸軍に入り僅かの間に先輩を凌ぎ公爵にまで經昇つたのも長閥の寵児で太平條件に恵まれ風雲に際會したからの事で、真に幸運の人と謂ふ可きである。且公の傳は成功傳であるから崎嶇たる山も激湍もない、如何にも單調のものである。晩年政黨を組織して漸やく長の先輩を離れた径路を歩まんとしたが我許もなく歿した、公の一生の行事を軍役と政治で外に何もない、大隈侯の多角多端の方面であるのとは同日の談で無い。又大隈侯の失敗と光栄に充つたのとも同日の談でない、現に公の傳は彼んな如く浩瀚であるが、大隈侯の名は一つも引合に出つて居ぬ。畢竟長閥の先輩山縣伊藤の範圍に居たのであるからである、蘇峯は緒言に断つて桂公の成功はひとり公の人の功にあらずと云ふて識者の議を避けて居る、公の成功の大半は外交に属するが、小村が抵外北當面に當つたからで、其功の一半は小村に帰すべき

であるハ言ふまでもない、之れを総ふすんば成功者の傳ハ書き
やすく単調の事蹟も亦甚し叙しやすいのに反して大隈
侯の傳記ハ全く反對で侯の事蹟の多角的な八方敵
を受けて渦つた錯綜の生涯を叙するのでは
比較にならぬ難路の山野ならまだしも伊藤公なら早く殺し
又は侯の先輩たる木戸大久保岩倉等ならまだしも
複雑であることを了解せねばならぬ、侯の一人荊棘を
ひらき途を遮るあるものと戦つてひとり政治的の文化をひらくある
る方面の新路を開拓した此點も他の政治家に全く
匹儔がない、随つて其傳記を叙することが甚だ容易で
ない、別して維新の新乾坤を創造する一大努力は
桂公の與らざる所で、之れを叙することは

無い桂公の傳とハ比較しならぬ、併し桂公の傳を讀むで
もヒントを得たことが二三無いでもない、殊に主人公を褒
め過ぎぬ事、政敵を貶し過ぎぬ事、断定語を可
成用ひざる事、地位對等のあるある人の名を省く事、
主人公の為め忌むべきハ省筆に従ふ事、叙事赤裸である
き日本帝國史取りの資料となつてハ困る事、等である、
而も桂公傳も伊藤公生涯も政治傳も偏しるべきところ
大隈侯の傳ハ此の二弊を為さぬ様注意を要する、お
よそ此等ハ桂公傳を讀むでも初めて氣のつきたるもあらうす
唯だ此傳を讀むで予の所懐を一層深くした
るのであります
九月三日記
日神田の書店を探り香乗十六冊を得たり、

一 香乘

庚本 二十八卷 十六本一帙

北書目の周嬀胄江左の纂輯する
不ること 香品、佛花法香 宮掖花香
香異 香譜 法和衆の香
凝合花香 重佩と香 塗傅と香
香譜 印香 方圓 香譜 香爐
香詩 香文 類別して凡を香
に関することを廣く輯む 支那に
於ても香に詳なる書北に出づ
ある可し 余久しく香乘の書を
もとめ、而して之れを需めて得ず 宮
日本、纂して支那に生りて拾の

し孫氏のの書に屬す、墨譜筆譜と
共に文房に列して可也(傳十六回)
卷首萬歷戊午中秋の前二日大洗山人
李維楨本寧父に序あり 又崇禎
十四年 纂者の自序あり
北の神田の書房に海(南)南岳の四季の花の圖
卷を珊瑚版に附したるもの二卷あるを見 閑に伯七
て熟覧するに 南岳の抱一の一花
のみなる人を先珠と国 南岳は抱一の一花
此国巷の市に珠と国 なることなり、
もしろき事歴あり、正 北原本に就きお
就しの死的遺に 母子親が久しく病苦い
つきし後 或る夫人 病苦を

甚めんとそ切なる某寺の僧の子を愛重持かさる此
書巻を得て得心之んを子孫に示しとゝる子孫のめと
こゝに悔んとゝる、ろ方無無ゆゝして已まず、此の
巻をお嬉枕と称して日々之をあこがれ其の病床
日誌に日々其の情を漏らすとゝる病床六尺を護
とゝる、ゝる事ゝ、遂死の病人に、殊に其の情を
モルに子沼就て僅の命を繋きつゝあるし病者
の無聊なるを、持主も時の慰を慮り愛ゆとゝる
紀念のものとて手放すことを肯ぜざるしを、子孫
の思食に既に堂まるることを、死後(死後)切を
條件として、セメテ生前に限を答を表はさんと
漸や〳〵持主の許諾を得、子孫と本死第紀を報

せし時に子孫に愛惜なる其のこまく
の情に感じ病床六尺に残しあるを、子孫も病
中画者を慰めとゝ、ことも、あんバンえを愛しも無
理ならず、斯る来歴もあることとして、此を意ある
ものとして持主と共に其の終に失はんことを百方
其後を美術の極の極の毋有る恨し 稿本
子孫の来歴を海くて三年許前出版さんとする
也

九月三の録

○震災の為に家の玄関を取り拂つて為める住宅の次
の間から障子紙を家前の松を見る枝ぶりを
入口ハバラックで為るが外部から住宅の中が
見え透く様ではあり、用心もとるにかゝる入口

から信濃の山の低い塚根を伐りたのを竹垣のようにしてあ
る、娘が北海道に朝鮮や秋海棠を植えて見ようと言
ふから其言に任せたが、今は朝鮮も秋海棠
も枯れて乱れ咲き大蓼や田通りの茅などが高く
生え茂つたのを門に入るまを遮断し
遮かめるのか、此等陽光を防げ防ぐ時節
は来ては[illegible]
云ふ句の執がある、玄関前の松が昔日の面影をうつて
ゐるので奥深い庭園があるこの松るも見へる、
こんを煙に負之隠しといふ句が俳句に
句執のある、誰れやらの句に花菖蒲田あるも
「菊畑」といふがある、夏け惜しみの情が見

へる、自分の秋を惜しむ情も
[illegible]
○此る嬉ひ得た事乗をザット閲する香を就てあ
る事が載せてあるが、謝香のことが全く見あたらぬ、
日本の香書の大半は謝香のことを関したものが香の執味ひもあり、茶藝術ひもあり、
からいろ〳〵流派もあり、奥儀秘伝などもあり、此等
の事ばかりを書いたものでも香乗の巻数以上のあ
があるのに、支那などは古来謝香の役かうのようなもの
こんな日本独創のものもあるが、日本でも香
が寺院に常用されてゐる外に貴族が玩用し花香
を得ることを楽みとして多くの財を投じたことなどもいろ

く傳奇的の談柄もなく遺(遺)てゐる、又香が茶道と
絡んで考へべきものの發達もしては、源氏香やら
競馬香やら、香を聽えて香名を鑑識する心と
を結んで種々の工風が起り、之れを專門とする法具
數寄のを極めたものもあり、ひとう香炉や香合などに
勢家紋を極めたりとうひハまい、競馬香の具などハ
ぬるも後世のことで、碁盤の如きものに上に騎馬の
人形を置き、セ方の指物を入れ、溶くとうまる
芳芽の花もまるく指物の形の如くなるもの、香札、香
包などまるものも明るく指物の心で、香札を或る
紫檀と出るまで或ハ蒔繪を施し、香の名ハ金銀の
泥で書いたりとし、香の包とまるを絹地で表

面を結つた材料とした或る一定の方式でいろ〳〵と
四畳之、芳の包の内面を絹金襴で、表面は極
彩色の絵を画しなどしたものが所々にくるとと、
源氏五十四帖から香の出来名くるとと、
とうとなるが、そんなに甚だ趣味のあるものでなく、いろ〳〵
のものを応用された一種の極
の宝ものとくす珠とまるものを吊し、こんな丸玉数
配のものを手巾のこと花鳥などの彫や或る
押絵などで装飾した円形の袋の中に菖蒲を入れ
芳の用意の上下に色紙を編む紐を結び、下部
の紐ハ房にまるで一種の風流を為て
まるものもあるが、此芳を此方の方式から

は、香を焚の帯するなんに種々のものがあるなれども袖
香炉と云ふものは西洋の風を採用し用途球の
中に火燈を焚き置き、或る仕掛で横倒しても常に
火燈が水平と保つ様にしてあれども
モトの中に入れて置くことも出来て、香を焚くに用ゐ
る「銀葉」と云ふものは不燃性の雲母を四方銀び
へりを取り、それを火上にあげ、其の雲母の上に香
片を載せて薫ずるものである、尚使途の
上手と云ふと香箱の香を切る道具ツチや翹銀
葉を操作する具に色々の式があつて
専門的茶人的の趣味があつて支那では香具
香器にどんなものを用ゐるかあつたが香乗などを委しく

い、要するに彼れの香の字用ゐで、日本のことを附
帯的味が無い様である、日本の香乗は恐らく
純味に於て彼れを凌駕するであらう　九月雪録

右一二のことを追補す、聞香ときさまざまの工
風あり、香盤の薄に馬を置くは前陳の通り
の形式なり、それを鶴と亀とを置くものあり或
は竹皆に人物の乗りたるを牧童に曳かするもあ
り、唐船に唐子を乗せたるを入るゝことあり
講を一場野遊雑遊とするもあり、擬して射鳥香
といふもあり、香盤に山を築き楓林を植え牝
牡の鹿を置くことあり、趣向を千変万化とも
云ふべく限りもあらざれど、香盤も之れ程も皆な

物巧を極めたる仕立にて、すべて開秀にて香の組合
といふことあり之れを組香といふてあるが、之れを組す
ハ詩や歌の句を取りて名付けたるまで
或は古歌などを小なる短冊へかき、之れを梅や
桜などの盤の主樹の枝につけることもあり
謡を聴くこと既に風雅高尚にして深くしるハ其香道の特
色なり

○神田の村雨庵に四五の書を蔵ふ中に左の数種
あり

一 書禅録助　三巻合一冊
中山高陽の画後跋義　法言著

流布まれなる原刻本なり得がた
し、高陽の見識とその跋ハ此の
頃著るるもの見るべし

一 信濃地名考　三巻合一冊
北条原名神田名興地」といふ信人(日大
井の鄙山の北条)法言著ハ流布まれ
なる原刻なり得がた

一 宇八比経考　下巻　一冊
天保十二年刊行なる五流の考証也
なれ帰敬のもとなれども一本刷ハ
ほとんどなし、他の補充を待つべし

一 諸子四種

無能子
天隱子
平文子
公孫龍子
嘉靖版式ニテ宋槧ト校方輯ニテ
ヲリ、或ハ業出中ノモノカラ思ハ
ル
北海ノ皆之友菊池晩香ノ手澤本ニ、紀
会ヲ婚ヒ入ル　九月四日記

○畫譚勢助ヲ二三ノヲヲ初シ他ノ参考ニ供
ス

一宋元人ノ尺牘ハ墨印藝印ヲ表ト云ヒテアルノ
朱色ハ書ニアカラスト云フ文人部諸ノ印ヲ墨藝ト
ヲリ北方ノ古書ニ入マク墨印ヲ表中ノ印
ヲ見テ知ルヤウナリ
一阮元筆談ハ書ノ善悪ヲ志ヲ人ノ言ヲ
元捨スルヲ耳鑑トイフ
一北方ヲモ三四十年前ハ三幅額ノ中ハ道釋ヲ
用ヒシヲヒヲ周濂溪先生ノ図ヲ著ハヲ
ハヲ時ハ虎ハ図行ヲ画ヲ婚聚ノ
図ヲハハヲヲヲ
一唐画宋画、斎ノ字ハ江戸日本傳斎紀ヲ引ケ
モヲヲ也

一 古書にて印を用ひす唐こ倣らひしこ
一 海棠天狗の像は其和詩をひのかすう侍ふと云
ハさもあらざべし
一 陶淵明の琴は絃を画かくに全からず音を聴
そ絃ハ音

○朝顔ハ朝咲いて夕もくまむ一種の長花なり
例常牛花の字をあて侍う、きっくさもめしいろく
の花をあさがおと称くなり、木槿ハ波知須なり枝梗
ハ常牛花といふ、又槿花の毒命短かく果敢なきさま時似たる
光陰の譬へ槿花一朝の夢アサガホと云可
ら撰くて云くるなり槿をあさがおと云(し
ことハ典風集さくらの花のうたん)

いさかつりのん朝うの花の孔と花さくらうつろひさ
りてなり、又朝こ生んだ多へる死す蝉を毛詩の
古訓こアサガホと訓みなり、和名抄や宮抜ても
人参を久末乃伊と訓するとも人参ハ
の新しくなること敢て珍らからず

○子の日うか松をひくことハ古き習慣なり引
とハぬきこえる也何のあるか松を抜きえるとハ松菊
と同類の人間の物を助くるを信也古く本草
も其效あることを云なり、若家文学をもって松樹
に倚り其腹を養ふ、風雅の宴を除く菜羹
に和して食ふ、義味の補和を得ることあり、子
の日こハ松を引き四
の日こハ松を引き四

き苦しい身軽を賛嘆し、芋のみ、豆菓のごとく汁の代に食用に供し、伝物の某氏の某氏と称し、代々の食用に供する所あることか、拙めて二の

き松を焚すんバヤニもぬけ芋みもち、松葉の古

粉　とるらし、小松引きの歌うち芋茎を搗む

ことをうく云つて、荒菓とか松を混て煎じるか、

又今の俗の茹子を細く切つて油をかく煮る美

を松もどきといふも、松の美の汁に似て黒口を

帯び油気もあるより云くの名つけるうんとの

説あり

○摂津の須磨を渓路と海を隔て岬々へ芝人々

との隣距離のあり苦しい海船うち交る）しけるか

渓路の海船場を右辰と云ふ地蔵とか、海船の

場合うち須磨の海を火を焚くと合図とし石

辰ゆうも芋の生を見て同じく火を焚ても芋の

合図に成し云ひ船を出しとうとハ左もあるべし、古

歌に「あハぢ路ゆ」の須磨の海を

の歌として「渓路の火」「須磨の火」などあり、雑解

を焚て海船の合図をする（あんも、火

芋の和解をおのつから解を得て何も面倒ハな

きせ

○貫之の土佐の記うち往て戯れ事を書くとう京日記あんを

るき言葉の渓路かとき文章の間潮うち以色

清ちゝ心つかず、清女安めん、脱字やあんそ
ゝあて、種々の解をなす、原文の本意を失ふことの
かなし、十三日の條りに、古来難解の言葉多し、

なんのあしうげれこゝとつけて、はやのつまのし
ずし、さーあえびをそ心ゝもあるゝ、はぎし

あけて見せける

元々誤りのきはめ誤脱もんそ云へんある文章
そんそ、たゝあるゝ、大意は何をうは恥もそ
ゝあ、女等が蓋の裏陰かこつけて、浴場すとも
おの〳〵ち陰つの老海鼠の裏の貝を鮑の用
個かいえい、貽貝は若き女の陰の鮑鰒をも
の陰つこあて二種とり生きるべし陰つ鮑鰒
す、鮑りしえ、セけるよゝ鰒を、老海鼠

は、ナマコの数ゝて男根によるもく似貽貝は里貝ゝ
ゝあて女の陰つる似ゝ又蛇等の貝を鮑の用
ひしは延喜式、主計式上に云、貽貝保廸文鮑云
ゝあて蛇等は鮑の扶桑は代ゝ海老ゝ
のゝゝえは銭銭別の貝ゝあるもの、自ゝかゝるもの
り、ゝえ、ゝうけ戦ゝ。ある用ひゝゝ、尚此
文の外れも、只おしあわちくちをの、ま、此ゝ
のくち、おしあわもしたもふやうあんや」とある
ゝ。前と似ゝ戦文ゝ

○三十一文字の始めをゝあるゝ神祭

やくもたついつもやへがき つまこめて、やへがき つく
る、そのやへがきを

此歌に新しく古来いろいろの注釋あれども八重垣の
解釋あらざる此歌の意思ふに共を兎か
角ハ雲立つ共のさまを垣の如く絵くる芳垣
ハ閨房のことなれば、房中に置くの障屏のこ
ときものあらざれば、言ふかとし、当時の宮殿
ハ皆高のものにて、室のたきりをひろく衝立
のごときものをもて界しとること考像の雅ハ共
の障をば垣といひしこと古書にあり絶
垣を造りなすとあり又文垣の名言もあり凡
そ上代帳帷の類の、寝不の陽をば、が伎といい
へしい古事紀中の初歌にも見へたり、善通の垣と
見えの此歌の奥味いまだとして閨房の歌とハ

成りかと

拾穂部の名著の一として数へらるる八山房叢
子（初篇三冊刊行）うち、古文古歌なるもの
雅語を解しいる也、なれハ原名雅語考と
云へり、一夕觀讀するに、守部の考証なる
ものくく解し雅とさえいふ語の解を得る
の或ハ誤り解なるを正しなるものかな
以上五則ハ乃ち其内の拾穂なるべし
なれども業ひ学を家につまるべ
なり無きことい家の也に就て見る（しとい）

九月六日記す

の田能村竹田が祇園の狩妓花珊を呼ばんと文の言しがあり、竹田も浮瑞瑞と誘う三院にいくらの酒れるに、かつて野分の日の花珊を聘しに来れり風流無尽なるあるとのぞ、竹田も心を動かし、遂に竹田が息の本酒子「おきごとろう」を妓と宿かしごとしあるを、青妓を京をもつて蒲団時の名陽を教れ

（九月六の録）

ものとなる

十三日朝のきこえ

十二月三日きわめ申候　おきこころは

本酒子にて、もえや手がつきいち

きのあはわけをセわーきお田からのようにわ

ざとの街の、ゆあべの残燈の影をくりかへしくよくよあかし、あさまりの田舎人をかなはすんと兄弟ふい、うれしきやうなて、なのかくかなしくおぼえて、すいろれなのえびこはん候氣のあうとうし、ひざとひざとすうあはせかたうあい、をのこれくくなき　ことにこを侍ふを、かゝる折とけるうあことばうけ給はるんとハ夢にもおもはずかし、このあきうん用の冬う候ゑ、又ものぼるこ心くゑあく、せにことしのうちんのぼるん花をる月をなかうえ、歌えゑ酒のえ心あをびーきんとをうえにのしえゑし　此ごろの文句のぼはしれ　そやうん　此世ハあるの

かうまくら、思よきにてうめは書のなごりに、へば
ゝ御心やすらうに御とゝ候へかし、御やまひ
のかさろう候へんかと、ちえゝ御あんじ申そ
古歌
金あるばあふよりもめん世のやしなしなどしめ
ばかり思ふこゝろそ
とにかく御効を御なさるゝなさるゝ、やうし有ゝ
又々なこゝろの品ども御をくりくだされ候、毛紙
もいろくとうつろふいろにめでたさ、御うつり
かさく、いと身にしみておぼえ候、御くわしく、
行歳の石ゐ思ひ〳〵おもしろき滝さまたへて
申候、御歌のおやわしき内にも、かなるぶ、また

除の四やうにと有、よき度りうえ御えせ御下候へ
かし、中上手ハ山くさうえ
思ふことこゝろの内のめこしおきて
なにもめでたくかしこ
むつまじき月十一の
なるもあはれなるものも、しかるべき
ふもの、初ちるえ手ちえ、あさま
しきまもれよこん、こゝも御なさめの
枕の上のときにと、金葉集一部、業者
極深く上
梦に見る人はあやう春の夜の

おばろ月うなほおほろそ
ゆすがすいかりの火びおかの月もそそ珊
しらへの春もきいたいナア、なんとセ
うしろうみ、ふまもひかけてあるさるみちん
のいとを、ちょっとはずして沛もらひ上
ぶあとらきん どこれもあ、手なもとが
ぶ。

○税務署を手付所得申告書在の如し

大正十三年分第三種所得金額決定通知書

氏名	所得金額 千萬 百萬 拾萬 萬 千 百 拾 圓	摘要
同居家族		
長人子	一七九三一	内山林所得 圓
昌子	二一R	同
みつ子	三七	同
やま子	二一八	同
		同
		同
		同
		同

右ノ通決定ニ付及通知候也

大正 大正拾参年九月五日

四谷税務署長
司税官岡田宗治

注意

一、此の決定に付て御不審の點があれば詳しく説明致しますから御遠慮なく御尋ね下さい、當署へ御出で下されば好都合であります、代理人を御遣しに成つても宜しう御座います。

二、決定に對し御異議が有りますれば此の通知を受けてから二十日以内に審査を請求することが出來ます別に書式はありませんから便宜の用紙に不服の事由を詳しく認めて東京税務監督局長宛とし當署に御出し下さい。

三、税金の算出は複雑でありますが上記金額のやうな割合になります、審査を出されましても審査の決定が有る迄は此の決定に對する税金を一應納めておいて戴きます。

所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額
六〇〇円	四、〇〇錢	二、〇〇〇円	三、〇〇錢	三、〇〇〇円	七、〇〇錢	七、〇〇〇円	一〇、〇〇錢	一〇、〇〇〇円	一五、〇〇錢	一五、〇〇〇円	二〇、〇〇錢
一、〇〇〇	六、〇〇	二、〇〇〇	七、〇〇	四、〇〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇〇	一五、〇〇	一五、〇〇〇	二〇、〇〇	二〇、〇〇〇	三〇、〇〇
一、五〇〇	一六、〇〇	五、〇〇〇	一七、〇〇	七、〇〇〇	二五、〇〇	二〇、〇〇〇	三〇、〇〇	二五、〇〇〇	四〇、〇〇	三〇、〇〇〇	五〇、〇〇
所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額	所得金額	税金額
三五、〇〇〇円	五〇、〇〇錢	四〇、〇〇〇円	六〇、〇〇錢	五〇、〇〇〇円	一、五六、〇〇錢	七〇、〇〇〇円	二、八六、〇〇錢	一〇〇、〇〇〇円	九、二六、〇〇錢	一四〇、〇〇〇円	一四、九六、〇〇錢
三五、〇〇〇	七〇、〇〇	四〇、〇〇〇	八〇、〇〇	五〇、〇〇〇	一、五六、〇〇	七〇、〇〇〇	二、八六、〇〇	一〇〇、〇〇〇	九、二六、〇〇	一四〇、〇〇〇	一四、九六、〇〇
三五、〇〇〇	一〇〇、〇〇	四〇、〇〇〇	一六〇、〇〇	五〇、〇〇〇	三、一二六、〇〇	七〇、〇〇〇	五、七六、〇〇	一〇〇、〇〇〇	一八、五六、〇〇	一四〇、〇〇〇	二九、九六、〇〇

四、税金は本年九月、十一月翌年一月、三月の四回に分けて納むるものであります、其の都度市區役所又は町村役場から納税額、納付場所等を御知らせすることに成つて居ります。

五、御轉居のときは税務署へ御知らせ下さい、電話にても宜しう御座います。

山来所得の調査表を参考として本人をして切て調査
行届き一石余の年貢、毎年自分を負担することに
なり、唯れる山林に対し二百俵を納めるの筋なれば
種々罷働如何に有り隠れ難き事なれど
苦心の上立て、此の通り山林に対し
用を弱め、此の税額七千貫六十四円に附
加税あると知るべし、余が此等の財政状態は斯の
通りなり也

九月八日記

○近刊の中央公論の秋季増刊に「真山青果氏」と
人の書きし脚本「玄朴と長英」を収む、研究
横断之れを読まば、高野長英が
牢獄に入ること二年、火災に乗じて脱出変装して友人

伊東玄朴の名を訪ひ、通知の金こちらこと金を借んことを求めしに、玄朴之んを応せず、果は格
闘に及ぶも玄朴終に応せずして、長英に立ち去
ることいなが一言の口論なりしを極めて単純の一幕
拘束を為人の河合八郎なるを出し、此此事を出発を為
然るに長英は常に傲慢の
態度を以て言の如く長英は傲慢の
とす、玄朴は野に下り誇り自家を誤ることなきを
古英を説き赤松名岩山
及び而して岩山の自殺と
あり世の言ふ所と同じからず、赤長英の色を知
りて玄朴一家の解釈
の通りなる玄朴一家の

酒を飲み、時に玄朴の法を妨げ
或は無礼の言を弄する（ことあり）玄朴敢て屈せず諫めれば
説き始るかれこれとして怒らず、維持長英の長所を考へ
くまと同時に其短所を扶助して完璧なる、其の需め
に応じたるを以て、自家の性格を防衛するの已むを得
ざるに出づと為す、長英の性格は玄朴に比して遠く
及ばず、而して自家の性格を目標として（模倣）の用
躍如たり、長英は何人も知ること〻霸気満々たる革
命家なり、殺人は冒険を言とせざるべからず、彼は奇を
衒へば（殺人を）さ好ハ已まず男子、彼は巧みに人を
煽動して人を搦めるの術あるべからず、玄朴の言と
後へは華山も長英の煽動に罹りたるべし、彼は到

底、愛の上に死に如きの人物なり、傲慢不敬多く敵
を心多之れを言とせざるべからず、又玄朴説
かざるの人も知り且つ再かく解する性格なり、玄朴
の性格こゝに（ハこんら）長英を知ること也、玄
朴は鍋島家の侍医なるのみ、長英とは大いに異なり
ボルトの門下なり、門生なり、長英は四歳長
新思想を持する點に於ても長英とは異なるべし
行き方は長し、因しかるに、彼は情熱の為めに生きる信條を固く
守らんとす、元もまんは長英の如く杜けん人なる
を深く恐れ、此の今なる自家防衛の如くなる金
力を尽くして彼の面目あり、彼は長英の

又新し拒絶しかされし友誼あれども一面[illegible]にんの信條を貫ぬかざるを得ざるもデレンケルかゝり、松岡しても抗爭し、其長英の地を達せずして帰る後ハ却つて友誼の厚き涙を落すもの、玄朴の長英を憎むい役人が自家の本領を犯さんとするを憎むもの

長英を憎むもの

此時色々[illegible]

今の思想家も解する不あるが如く、面白味あゝ作れ之新

長英の甘姑終云ふ逆かゝるの前し玄朴の飽う云ふの多きんドンナこのあらうて、九月八日

記

○城後の猪彦と尾張の丸田といふ者の関係があつのを人い多く知らぬ、丸田の方が金ちと有るもの

ぬるが、実ハ本家ハ猪彦であるので、日本武尊の時代よりも前と丸田と今宮しるのである、なる書一程実と証明すべきも古墳ハ系図もあつて事ハこゝか出来ぬ、千秋男爵ハ丸田と猪彦と跨つての役人である、

○松崎恒豊の祖也卯吉「曾在松崎氏」と刻したものがあつて、徒々その前を捨してあるのが有りて、書物を流通あれ、いくらでも好容易と云ふ卯吉を捨し四て来ても後まで轉輾する[illegible]極まりてみる、これを見て恒豊のことを刻するを一見後であると感じて

○菊屋の人去年の俗屋後柿舎ハ京の小倉

山附近にある、岚山から松の並木を分けて行くと道標に「北浄瑠璃寺（宝寺）西、小倉山（寂光寺）」と指し示してある、今日も縁に沿って行く。樹が一本ある、庵は茅屋で三間ばかりの小室がある、そこが嘗つて玄来の住した所だといふ北の庵の来歴を訪ねると、昔し富豪三井一族に連なる三井秋風といふ人が金を携へて這つたのを、何者の仕業か盗まれたとかで玄来が立ちくさんとなつてあれこれと去来があく買い取つたのだとのこと、勿論其頃を一回る間もあく松南立流るるので嘗つてあつたらう、嘗つても花筐も半ば月も北庵と呼ばれることもあるが、花筐の曙既日記の北の庵の名称が書いてある、

元禄四辛未年四月十八日曙既を過ぎて去来が義仲寺に詣る、凡兆とのもとまりて昔を思ふ、余いまだ暫くとゝまるべきことなれども隙なつかしく、葉引かちらす、食中の片隅一椀、机一つ、硯、文庫、白氏文集本朝名人一首、世継物語、源氏物語、土佐日記、枕草子、源氏物語、五年の昔と、とまるべきの菓子を盛り、名酒一壺、盃をとゝのへり

和の食、調菓の物、家に持ちて多し

かゝる我貧賤を忘れて清風を楽む、

ものいきいてみる、花甚の句つゝに頭巾

てのことと思はるゝ其の間息の久敷う菩提寺が日記の
続つてゐる

後柿舎は昔の主の心のこもるまゝにて、家と数寄
す、中され咲うみかんなる昔のさまもまた、今の
あんなるさまこそ心とゝまれ、船せし梁、書
る壁も、風に破れ、雨とぬれて、高石垣松も蘿
の下とかくれ、苔、竹縁の前に柚の木一本花芳
しければ

柚の花にむかへ思ひ出る料理の間

菩提寺庵中は去来の河の清閑を好まれしとも
さと思はれて京都上長者町の宅に宿し、時々来り
給ふ、此の人達も去来を訪ふこと

ハ十年ばかり奥ならう、菩提寺の柿を詠
む句が多い様に、丈艸の海の左の岸に柿を植し
てゐる

深草嵯峨 伊島通、就是素似四人、
枝数今欠赤乱 卯、十六夢と洞頭花夢
去人通過石士の別荘 双柿舎のるまで思ふ今
ハセて、一ばいハ去年の九月を訪ひ、くゝ思ふ
て、その梁れとこゝを大明を記おく九月雪
去来の養ハ後柿舎の背後 竹林をの
聞いた所に大きな柿が立つてゐるとこと
一尺程の自然石に去来」の二字を刻むの
がそのひあり

○芭蕉がうんぬんの俳諧の論と書きつけたる御其方の記事
かなおもしろい、閑寂は俳諧の本領ひとしきあり、芭蕉は北客の消息を傳
人とするは俳客の卑しきもあるべし、芭蕉は北客の消息を傳
うるの意味でまく道理とも

廿二日

朝の間雨降、名は人々洪喬まれに来
書して遣す、其言
表と長き者は悲をあるいと
酒をのむ者は閑をあるいと
愁と住する者は愁をあるいと
徒死と住する者は徒死をあるいと
閑しさをあらばうからまと而上人のよく傳

るは閑しさをあらばうからまと、又よくある
山とんこはまと雅をよぶこと
獨すまんとおもひしこのを
獨すむ花雨白きはの、古渡隠士の日客
はまの閑を得んは、主はまの閑をえて、
素雪常と此言を悔む、余も又
うき我を閑しかくせよかんこ鳥
とは有寺の獨をも云ひ句也
○つんぬの折柄帯を出入する書畫高才珍畫冊
を持ち来るを見んは金か廣の定尺なるものを
拔てうんは坂田弱象の蓮を十五枚こいろくに
書きつけらるるもの、毎度の風味あり、珍重

八幡卿の手蹟の書しる山水ハいく幅も第中を更
ど、花卉ハ初めて見る事、且つ極めて品ちるかうんし
く終に賜れ入る、コンナ品ハいつか集めんハいつし
か稿ち、尚ほ十数を得バ百と生ちんとすゝもんやう
る業れ金を投ずることを憂ちんと思へど、折角集
めまりたれバ、切めて一束に満ぬ、つまると雷執
着あり、

○山崎覚次郎（活字博士）の来訪を得た、用談ハ俗事に
関したことであつたが、前年版ると北本がまだ残
残つて居るから、覚つてくれと云て出さんに本を見
ると、福井遺文二冊であつた、既に刷の本であるが、山
崎が出版したのとハ今ら氣がつかずるゐに成る

と称する福井の掛川藩の士に儒者で、山崎も通
交ある掛川出身である、親族関係もあるかを少し
たゝ、覚次郎の父ハ福井
る文集中に農園の記
記したものである、福井の
とを惜むで覚次郎の父
果さず弱しなのを、その志を
ことが知れた

○日下勺水（寛）から其文集一鹿友荘文集を贈
られた、六冊一快、一冊五十枚（全部三百枚）
ある、北の出版に就ては亡友仮の五峯が、自分の為
る所業として、細後の市豪高橋彦大郎氏

大失敗に終る

米國總動員デー

却て熱を煽つて非戰

【ワシントン特電】（十二日發）陸軍省主催の國防總動員デーは戰捷大戰出征米軍のサンミエル戰勝並びにパーシング將軍退役記念を表面上の理由として本日擧行されたが寧ろ平穏に終りを告げた動員デーは米國でも特に愛國的精神の強いワシントンにおいてすら不成功に終つたとは陸軍當局も認めてゐる、ワシントンの愛勇軍はその七パーセントだけが本日の催しに參加し各學校の兒童もはらずまた市中の會社商店は半日通り營業し一般に總動員デーに對する熱は沸立たなかつた、陸軍當局は國防デーの失敗は平和運動者並びに議會の反對運動に原因するとて彼れ等を非難してゐる大統領クーリッヂ氏の政策を擁護してゐるニューヨーク・イヴニング・ポストも政府の動員デー計畫は愚策且つ不必要である、かゝる計畫の大眼目とする所は平和的精神の促進にあるべきであつてそれには併し常に準備を閑却してはならぬと云ふのでなければならないと斷言してゐる、ニューヨーク・ポストは

本動員デーは次期議會前に陸軍經費の增加をはかる目的を以て計畫されたものである

と論じてゐるまた前外事にしてかつて民主黨大統領候補者に立つたことのあるジョン・クラーク氏は意見を述べて

本國防デーは軍國的戰備宣傳運動の出發點とすることが出來やうと述べてゐるが一般國民はかゝる軍國主義的運動に對しては強硬に反對であつて平和の維持は唯平和的手段によつてのみ得らるべくかくの如き軍事的準備によつて得らるゝものではないと信じてゐる、メーン州知事バクスター氏は強く

▽…この感情を表白して曰く

予は予が動員デーに對し陸軍省と協力することを拒絕したのは予の知事としての職務を惡にするものであるとの陸軍省代表者の言に對し憤慨に堪へない、彼は須らく公然予に對し陳謝すべきである、予は予の職務に關しては予自身の判斷を有し敢て陸軍省の指圖を俟たない、予はメーン州の人民に對し責任を負ひ陸軍省に對して責任を負ふものではない、予はメーン州の人民に對し責任を負ひ陸軍省に對して測定せらるべきではない

軍國主義的標準によつてとまた佛國の文豪アナトール・フランス氏は婦人團體に書を送つて婦人の平和的使命を高調し『婦人は

▽…男子より も却て勇敢である婦人は人類を維持し、この人類をおびやかしつゝある戰爭といふ怪物を驅退すべきである、戰爭に對する戰爭を開始し、滅し難き憎惡を以て戰爭を憎惡し撤底的にそれをにくんで戰爭の罪惡を紛明すべきである、よし戰爭が勝利の光榮として現れるともこれをにくみ、そのにくみによつて戰爭をば絕滅せしむべきである』とさけんだ

とするこの無し唯此北城詩家の集荒平、東京得る能はざるこの又を請ふ、其中北城古今詩選（三卷合本）文政年間雲間為人の輯むる不也也書稀也ゆえ然へんとも此方の珍なる所以他こゝ五拳

十二

の北城詩話を著すること之れを材料とし、なりと云へり
原作に雅趣を加へたるものなれども、或は数回稿を改めたるものなり、為めに甄録
たるべし、或は一二句全く改めたるもあり、為めに甄録
こと変ずるの類あり、稿外に「採」「考」と墨点するものあり、五峯が採録の際甚だ忠実なる跡を徴ぬべし、
他日人あり北書を取りて北城詩話と比し、詩に異同ある由に惑ふことあらば、此手入本こそ鞏固なる
ものなれ、北書の孫なる本以て変と為す、蓋し北の
を去り清題の飾白に移して家跡のものとなす、北山
五山沈相孫并常陽秋石原人の序あり、亦五峯
の花山印美人秀州の印を捺す

北印刷物古来中なる出来る、的次の初年、芳原
相の展覧会を開きたるとき、折の出品目録なる主
催者の名も北の摺物あり、恐らく江戸版
味展覧会の最も権輿なるべし、北の摺物は「成
斎新書」三編の附録と記したるも、成斎
の余未だ及ばず、又北の摺物は
新刊紙に依て刷行されたるものなること
ご微しなるかも
○木版彫りと口摺りのもの、就ては前月も略しと
ことあるべかりし、亦其原のものなるも少へに
と一二略しておく

現在東京の木版彫刻業組合の加入者は七百で
僅かに百名、木版印刷業者も亦これに準ずる
程度。彫刻業とは文字彫りから、頭彫りから、各々其業を分ちて
頭彫りとは人物の肉體部を彫刻する者を
云ふのだ。これが一番むつかしい。即ち第一位を
占める上職人である。これが言葉は、あらう
か、文彫と絵彫とを兼ねて能くするこの人
勿論名人である。印刷の方も墨摺りと色摺
りの二つを兼ねて
職を捨てるのである。
苦しい浮世人が内職と彫りを学ぶとい

が、絵彫りや頭彫りを
で無ければ出来ないのだ。浮世人のやつれ
のの抵で文彫りもあつたのだ。
彫りの一寸考へると全く機械的の仕事と思はれる
が、実は大張物神的修養を要することである
のこの言葉である。美人彫りの上手と謂つた
如き彫刻は、音を出入りして人の文の故事
を物つたり、言の成るべく若い美人に接近する
技倆を以つて氣分を出すを第一とする。
如き、彫刻のも氣分を含ふことを創造家也
家に過ぎぬのである。彫木を見た丈けでも、
人の彫つたのか、牡丹の彫つたのか判断が出

来ると先練の版木ハ二つとなる
摺物の武器ともいふべきバレンと梯形の製造
を申すべく、その用ゐる扶桑はもとより三種をかけ
る、第一ハ牛の皮の繊維をもつて会セたるもの、
之ハ最も多く用ひらるゝ、第二ハ捻紙條を
もつて会セたるもの、アタりの軟ハ
印刷に用ひる、第三ハ鐵線をもつて会セたるもの
で、金箔落を摺る時に使ふ、扶桑が何でも
なくとも四五捻、八本捻、十二本捻、十六本捻と
通宜に紙紙にいろ〳〵会セ、それを巻き込み
の形に巻きこみ、更にこれを水の皮ひもで
ある、包み方ハ呼吸があるといふ、まことよ

り方ハ指先の破のるを捻き一書使ひ込むとしてみる、鐵線バレンもと
ハ京都職人の秘傳であつたが今ハ廣く行ハ
てゐる
梯形ハ刷毛の一種で、墨摺りに使用する、大さ
ハ三寸乃至三寸五分、馬の工り毛で拵へたものを摺
物の手ひ毛先を焼き、鞍皮でソロ〳〵とおろ
、天鵞絨のことくニナヤカにして使ふ中
古から大半紙者まで紙と四方摺と三方刷
毛を使ふのが定法である、色摺り用の刷毛
ハ大小共柱が変るけれど概して寸法ハ梯形より
七分さい、墨摺りのハ墨ハ折れ墨を清け込

凡そ一年位の所が最もよく、ほうたるこるとと
膠が落ちもこる」きとしとりくるこ、駄馬まへドブ
と称する方等墨汁を用ひる、毛掛りの絵
又こ姫物を交せ行う奉書摺こ白紙を使つ
たり、別毛の代りに メンポを用ひ、バレンの
代りに掌でこする場合もある
○身後の花を幼なる花出印文こつき、前こ松崎
慎堂が曾在松崎氏」と刻したことを記したことがある
別達の「集古」紙を見ると、のこんこ数しこ印文
がいろ〳〵載つてゐる、栗山の子碧海の花印ハ
「曾在紫碧海處」とあつて慎堂と略々同じい、山
東京山の「不期身後京山花」とあつてこんも同

長くあり、大概製法のハ「得共人傳不及子孫」とあ
り、文の長いのもあり「孔石山房主人秋田氏圖書記集
散任天然」「永為四海寶」とこふのがあり、山中共古の
ハ「今日家出乃天下書せ」とある、以上「集古」ここ
の特載なるが、尚ほ漏れたのを補ふと、
森川竹窓のハ「北書不換妓」とあり、自分のもの
「子孫換酒亦可」とこふの
尚ほ以上の外に「弟の花」ここ
もいふがあり、米庵のハ「米庵捐衣食所聚」とある
「子孫永保」といふ如き印文ハ勿論多いから北斎の特に
挙げ如、和学者の花印ハ佐々和歌を刻
したものがあり、伴信友のハ中央に若狭酒井家々人佐氏

「花本」と刻し其の周囲に片仮名で「コノホンヲカウテハ
ホカノヒトニハヨマセマイトヤクソクカヘシヒキヘヤ」と
刻してあり、長谷氏の印文は「てんぢくこう」と
黄金にかえなかなか新の方あるとむしにはまず
「文」とあり、高野彦磨のは印の面一偏に「葦の假
庵花本」とあり、朝夕自ら「はな」あるうんと
しばしば見たとくかへしてよ」、賜れておらびぬ
らまを寝て見るまをよ見しさかひの紙折るまをの」
代友や彦磨の印は文らて〻〻人に本を貸
す場合後に汚損を憂つるの上から楽しに文
である

九月十四日記

○三友坂口五峯の遺書と東京と称する青年書其者

三友印は其中に城後の文藻を刻したるもの十数
冊を蔵し入れたり、多くは北海道の材料を集めた
るもので中にも雑誌体のものもあり、山形尾ハゴミ
数を屠まるが自分等は印刷に関
係ある文はあるの興を感じ、一夕の親睦のまで
親族にて、片々たる旅行風のものでもと刊行した
ものがいろいろあるが、
明治廿八年新潟田で苦城義今といふものと復徴
し、其合から編集して出した新潟田偉人叢談
といふ平紙本なるは和文とあるべき新潟田
中の人物の名をあるが多く収めてある、標題を三友小
崎善四の筆にて、新潟の文字社の印が一隅に捺し

と有るを見るに、何を多く懐しき心地がする、巻中に芝田の同姓の遠祖が収めてある、其人は左のごとし

市野酒の詩を市野三樹三郎を敬するがゆえ

ここと

市野酒といへる人あり性強毅にして人と交ぶることあり、武を時頼三郎三郎といひしに来て紙後国に流謫なりし人なりきといひけれども酒やかして剛毅深澄事物を、隊伍堂々朝廷京、五戦千戈紀為利、八州爰欽豈徒名、衛枚夜渡千隈水、横槊秋高七尾城、遂茫南海知或個、斯公義氣和壓群英とふ詩をえせけるに、さすがの三郎三郎といへども感じて口を

とぢてきこえず

すべて文ちゃうこの書き物ども有家の一班をあらはすなるべし、

北地の流咏遺（北りの白紙整版の本が一冊あり、四流十二年日長堂古山文静の編輯にかゝる、巻首に秋月種樹永山盛翁（古の名人の影写かゝる、秋月種樹の撰文に白山公写池かこの文の初めに載せたる、嘉永年の大宦志士紙後に因縁ありしかの人に他日の人に知めてあるのみ、高名の人が紙後に流れかゝりしかの人の知りそうな芳人の詩八蒙を見るべきものなるを

嘗見し、そこに無味を感じ、自分がこんど紙後に因縁あることを知ることを

八、海を二十秋がゆくと

んハ新潟裁判所ニ来てゐることがあり、山東直砥が新潟ニ来たことのあるうち新潟奉行所のあるうちに新潟奉行所の英語学校の教員であつたことも初めて知つた、又野田笙南が帰後ニ来たことのある事も新潟奉行所のあるのを知つた、楳田の堂異廣木松ニ晒ハ脱して新潟ニ游ぶし後徳教授さる、自分い事務此人の携へ来りし古刻印を一顆貰ひしもあるが、その人の名が知れざるを遺ひ、

前原一誠ハ余が家ニ寓し比人、名和後ハ余が左右にあつて書後を受けし人であるが其人の詩ハ一首も残してゐない、幸ニ此集ニ収めてあるから好ひ〜

矢数　一誠

古城荒夜四隅、長琴鳴咽一丁琴酸、
雲殺月天如死、原野無人白骨寒

咏月

咏月　唫花未得真、十年好創就酸辛、輒軒
抱志歎時矛、遥向西方思美人

尺素　俊

尺素寄ニ雲間、愧余文業青春妍、仰看
天鑑無私照、一聯紅雲掃日斜

「城路花月集」四冊十七年一月出版奥附ニ城路社花月会事務所出版人大橋新太郎と有り

柳北の花月新誌に載せられたる漢詩文の外和歌をも載せ洋紙旋毛を巻首に一六石士の題字を序し則ち吾邦の星霜臺城徳士の号を以て北文豊城文彬に収めるや未だ詳かならず、花月を叙するに雪を冒頭とし為すを不と文章の妙を見る云く

天下佳花必推芳梅、称月必挙名山、吾邦風名花雪、亦可以二者誇人乎、曰可、何以言之、吾邦三冬積雪、餘凍沸春、故花候比上四殊遲、然及東風扇和、敷巳烘物、桃李梅杏、海棠梨櫻、山茶之艷、綉毡之英、同時俱発、有紅有白、有紫有黄、六門四望、唯見錦綉羅、満山鋪野矣、

視上四之前後開落、彼北不及、特為偉観、若夫雪後之月、天地一白、瑤彩瓊葉、上下輝映、石湖所謂天從雪後皆奇麗、月到梅邊有別春、者、惟越為然、而之観之、概之勝在於雪、因雪而益見月、豈不佳乎、

三行略

昔者群雄虎争、越人以武聞天下矣、昇平三百年、乃彬々興於文、然地遠戎甸、又與東京阻大山嶺、故雖富人強士、名聲不出四境、往々帰於斷畫灰滅、生之北岸得之越荆山之璞、一出為連城之珠、北産也、宜吐花書、而帶月華、其行世、吾知上国好事之士、瞿然注視首皆北指矣、

星霜紀の文ともに第の利いたる也　　花月主人記

昨年五月ノ本會臨時總會ノ決議ニ基キ圖書館週間ヲ催ス豫定デアリマシタガ震災ノ爲メ關東地方ノ圖書館デハ遂ニ實行スル事ガデキマセンデシタ本年ハ圖書館事業復興ノ意味カラ圖書館週間中ニ大々的ニ宣傳スルコトニナリマシタノデ東京デハ數ケ所ニ講演會ヲ開キ圖書館ノ利用ヲ促ス印刷物ヲ調製シテ配布シ其他意義アル圖書館週間ヲ過ス計畫ヲシテ居リマス故左記各項詳細御高覽ノ上貴館ニ於テモ可然御計畫御盡力ヲ御願ヒ致シマス

大正十三年九月

日本圖書館協會理事　今澤慈海

一、圖書館週間

一、毎年十一月一日カラ七日迄ノ一週間ヲ「圖書館週間」ト定メ、全國各圖書館ニ於テ一齊ニ諸種ノ催ヲナスコト。

一、諸種ノ催トハ例ヘバ

イ、講演

ロ、展覽會

ハ、特殊ノ目錄ヲ作リテ良書ノ紹介等ヲナスコト

ニ、圖書館、文庫等ノ特別縱覽等ヲ許スコト

ホ、圖書館ノ利用ヲ促ス印刷物等ノ調製、配布

ヘ、各人ヲシテ「圖書館週間」中一度ハ必ラズ訪館セシムルガ如キ趣向ノ催ト、其他土地ノ狀況、周圍ノ事情等ニヨリ各圖書館ノ思附ニヨル各種ノ催等ノ如キモノデ、以上ノ各項等ハ公私ノ社會事業團體、學校、書肆等ト連絡ヲトリテ行フナドハ、此運動ヲ一層有効ニシ且便宜ヲ得ルコトガ多カラウト考ヘマス。

一、本年ハ國民精神振興ノ点カラ特ニ前以テ御用意ヲ願ヒ、最モ盛大ニ且有効ニ擧行セラルルヤウ希望シマス

一、尙「圖書館週間」ハ十一月一日カラ七日迄ノ一週間デスガ、諸種ノ催等ハ

イ、右七日ヲ通シ

ロ、又ハ右ノ內數日ヲ選ミ

ハ、又ハ七日間ノ內適宜ノ一日ヲ選ムデ

御擧行ナサルコトニ各圖書館ノ御都合ニヨリ可然計畫ヲ願フ次第デスカラ、爲念申添ヘマス。以上

一飲限二盞銘曰

厄思也再斯可　慳堂

○北海箕松崎博士自筆を乞ひ給也

山崎覺次郎の父酒を嗜む事つて大杯を好む因人に勧分つ、北海翁と親しく交りを結ぶ

我が世杯に溢るるまでいふ、銘へ再思の意を寓す、一飲二盞に限るは酒客の思ふ能はざる所、大杯を作る故なりとせば、山崎氏も亦酒客の思ふ能はざる所なり、酒を以て人を誤りて、

十二

はい原製

老父送十二枚押み重ねし紙は例の慳貪日暦の裏なり、有之を摸寫して印刷せしものにして、文は飲酒家に有之の故右の文句を発見して大に気を入り早速京都の朱僊より煎茶碗大の酒杯を造り之を知人に頒ち、酒に次ぎて酒杯は一個も餘きず、小紙は残り居り、

一枚宛贈へ供し候間

九月十五日

市島賢蔵侍史

山崎覺次郎

○随煬帝艷史一部十三冊を婿ふ、北本の末葉
枚の版すて巻首に繡像あり、各回に名人の詩を
録す、流布本多く繡像を缺く、繡像中数
の遺憾、海内に三四枚あり、花陰に美姫を描
して接吻の図、任意車に美女と交るの図、冊葉
春を半ばの図、閨房の図の如きは是れなり、文部
に於て公布を禁ずるは之れなり、北本を珍とす
る亦図のある也、其源は煬帝の艷遊史
此書の図を缺てハ興味薄弱なり（昨年十七日）
往年繡像附帯の金瓶梅を婿ふて早大の図書
館に納めること有り、爾来常に後へて北本
を見ず、繡像ある北艷史ハ前古と比と珍と

まくきこうあり、近年刊行さるる艷史ハ繡像
を欠くのみならず、文章も猥亵に変じ居
る者略しあり

○彫刻と摺師の苦心は前号に掲げた複製今々報ゼラレタ記事があるので其心を詳述する為めここに収めて前紙の足らざるを補ふ

彫師と摺師の苦心談

（奈良繪本阿國歌舞妓に關して）

誰もいふ如く、版畫は綜合藝術で、筆者、彫者、刷者の伎倆が一致して、始めて、肉筆以上及び以外の畫としての特殊の妙味が顯はれるのである。版畫を複製するのも肉筆ものを版畫にするのも、之を刻する上だけでは、別段變りはなからうが、いつの時代の物でも、其時代の特色といふものが、筆者なり、彫者なり、刷者なりの技術に伴つてゐるものであるから、懸け隔つた時代の版畫や肉筆を複製したり。版畫に移したりするには細心な注意が要る。といふのは若し其特殊な時代味が伴はなかつたなら、それは恰も古名優の名狂言を、ヘッポコ俳優が眞似て見せた活動寫眞のやうなものにならうからである。さういふ版畫は骨抜きであり、脂肪抜きである。が、この時代色を刀とパレンとで立派に出すといふことは中々困難な仕事で、假令優秀な技術家があつても、彫者と刷者と意氣がシックリと合つた上に、全く算盤玉を忘れ去る程の道樂氣で、其仕事に沒頭しない以上到底完全な複製の出來るものでない。世間に往往ある形さへ似て居ればよいといふやうな古版畫の複製は迚も美術品視するわけにはいかない。

さて本會が第二期に於て刊行した「奈良繪本阿國歌舞妓」の如きは、技術家が近頃最も苦心を費したもの丶一つであつた。先づ、其彫刻には大塚祐次氏が綿密な注意を拂つて刀を執り、さうして阿部鍋五郎氏が周到な經驗に依つて其刷出に力めたのである。總じてかういふ苦心は中々岡目八目では分らず、其職の者とても、實際其術に當らねば分りかねることが多い。兩氏の苦心の夥かつたことを聞くに附け。徒らにそれを埋沒して了うものでもないと思ひ、其大要を摘んで玆に記す。

古畫の複製に就いては、其粗密難易は別問題として、原畫の版畫であると肉筆であるとによつて、刀を執る用意に大きな相違があります。原畫の版畫である場合は、巧拙ともに原畫に模するを主とせねばならぬ。が、肉筆のものになると、それを彫りあげて後、摺師の手を借りて之を版畫とした際に、恰も肉筆と見えるやうにと覘ふことが肝要です。版畫であると十中の七八までは、寫眞を應用して原版畫を彫刻する板木に複寫し、それをすぐ版下にすることが出來るが、肉筆もので而も胡粉入りの彩色などのある畫は、肝腎の骨線が繪の具のある爲に寫眞に出ない。で、念入りの複製となると、一旦それをコロタイプ版として、特種の紙に淡赤色に印刷し更にそれを、摸寫に熟練な畫家に托して、原畫と見比べて骨線を墨で書きおこして貰ひ、さてそれを版下として彫るのである。これを術語では墨板（いた）または墨版（はん）と言つてゐます。斯うして彫りあがつた骨線の線畫を、刀であつたら、途中で拋り出したかも知れないが、幸ひに大塚さんの彫りで要領を得てゐるので、先づあれまでに漕ぎ附け、完成してヤット一息吐き、重荷をおろしました。その仔細をお話する前に、一寸言

原畫の色を參照して摺り立て、それから一色を一枚づゝに色を分けて塗るのである。ところが、同一の色で三四枚乃至五六枚を要するのもありますから、原色が假りに十遍あるとすると、色版は其二倍も三倍も要することになる。其上、圖柄に依つては、附立もの、或は模樣ものゝ色版が、之を模寫するにも、彫刻するにも一廉の技倆を要する場合がある。で、筆者は只一葉の版下を、彫者は只一枚の版木を、受持ち刷者は只幾度か印刷をしさへすれば、それでよいといふものでなく、三者を巧妙に綜合することが出來ない以上、完全なものにはならない。私は第一期の「歌舞妓十八番」複製の際、刀を握り筆を執つて、彫刻家の立場から統一者となり、刷師氏と協力して幸ひにも理想に近い作物を得たので、大きに心强くなり、更に此たびの「阿國歌舞妓」の複製に一肌ぬぐ氣になつたのですが、前者とは違ひ、此複製は頗る複雜な緻密な畫なので繪の具や箔で骨線の不明瞭な箇所が多く、難中の難物でありました。が、一面には、斯ういふものを仕上げるのは愉快だといふ道樂氣も生じたので、そこで舊い經驗と工夫とに潛心して、原畫の骨線だけは熟練を積んだ專門畫家に托することゝし、色版は自分で原畫の色彩を辿りつゝ考案し、尙刷師氏とも相談して其意見を容れ、どうか出來榮えが原畫と殆ど違はない位ゐにと努力した結果が、あの「阿國歌舞妓」の版畫で、隨分頭腦を痛めたものです。現今世間に行はれてゐる版畫は、印刷が出來て後、始めて版畫氣分が浮動するたぐひのもので、版下や彫刻中のを見たのでは、其畫の可否は分らぬ。すなはち一切が出來あがつた上の勝負である。筆で塗つて塗れぬ色、書いて書けぬ線に言ひ得られぬ味を含むものとするのだから、線彫りにしても色版にしても、刀の切れ味が出ては趣きを失ふ。骨線なども、鑪紙でこすり、殆ど磨滅に近い版として摺るから、筆意、筆力などを尊重せぬ新らしい版畫體の線は筆に書けぬボウとした和かみを見せねばならない。これらは素人彫の方が面白く、本來は畫家の自畫自刻か、彫刻家で畫のかける者が遣るはうが成功しませう。

彫師と摺師の苦心談

（奈良繪本阿國歌舞妓に關し）

（前號より續く）併し複製は全くそれと別で、始めから原畫その儘に彫りあげる自信をもたねばならない。「阿國歌舞妓」の如きも、此點に就いては多大の注意をして、少しの我意をも加へないで仕上げました。要するに、全然とはいかないまでも、或程度までは眞劍に三者を綜合する技倆を有つて版木に向はなければ、到底よい物は出來ないのです云々。（以上彫師大塚祐次氏談）

「阿國歌舞妓」の印刷は隨分骨が折れました。それには用紙の關係もあつたが、幾ら巧く彫つてあつても、若し彫刻家が要領を得ない意氣の合はない者の刀であつたら、途中で拋り出したかも知れないが、幸ひに大塚さんの彫りで要領を得てゐるので、先づあれまでに漕ぎ附け、完成してヤット一息吐き、重荷をおろしました。その仔細をお話する前に、一寸言

つて置かねばならぬことは、版摺りといへば、唯バレンで版木をこすりさへすればどんな畫でも摺れるやうに思はれて居ますが、藝術味を帶びたものとなると、手間取り職人で渡り歩くやうな平凡な頭腦では迚も覺束ない。いつぱしの手腕があり經驗があつても仕事に對して道樂氣のないケチな勘定高い根性では到底世間から注意を惹くやうな立派なものは摺れません。上手、名人と言はれる程の技倆があつたとてもダメである。上手、名人といつたつて、つまりは、バレンの使ひ方一つで、口でも筆でも言ひ現はせない呼吸を自得して居るまでのことです。見本摺りを意に適するまで何枚摺つても、其摺り損じをヤレにせずに、立派に完全な調子のものに補訂して、無駄を出さない手際のある働きが名人、上手のそれである。さういふ名人、上手の摺師が一流の彫師の彫つた版木に向つて腕を揮つたなら、そこに忽ち立派な物が仕上がるだらうと岡目には思へませうが、若しも双方の意氣が一致して居なかつたら。存外出來榮は滅茶々々になる。ところがどういふものか、昔から版木屋と摺屋とは犬と猿で、兎角仲がわるく隨つて一致を缺き、彫りが精巧でも摺りでぶちこわし、摺りが高尚でも彫りの不完全で不結果になるといふ傾きがあつたものです。つまり双方の意氣が十分に疎通し融合して始めて綜合藝術の妙味が發揮されるのです。あの「阿國歌舞妓」なども筆者は暫らく措き彫りと摺りが一致したから、先づあの程度まで仕上がつたのですが、摺りは「國華」や「大觀」から見ると、より以上の苦痛で、大抵な職人なら中途でお辭儀をして逃出したらうと思はれます。といふとどうしてそんな苦痛があるかとの疑問が出ませうが一つは用紙が大廣奉書であつたのにも原因します。全體斯ういふ版畫ものには和紙の硬質な鳥の子が適當で、さもないと薄物と稱する普通の奉書でないと無理ですが、それでは紙の截ち合せに無駄が多く出るから是非がない。大廣は紙質がやわらかで厚ぼつたく、細いものを摺ると線がメリ込むので、印刷で紙質を殺さねばなりません。で、兩面にドウサを引き器械で締めて紙質を固め、あら方の準備がついて濕

りをかける。(版畫を摺るには必ず濕りをくれるのです)。いざ摺り掛らうとすると、濕り方がムラになつて、着手が出來なかつた。で、更にまた一工夫を要したのです。此濕りをくれるは摺立にかゝる前夜の仕事で、翌朝押板をはねると紙は水分を含み、押板に押されて紙幅が伸び且つ繪の具を吸收さする爲です。それを上から一枚づゝ取り摺つて行くうち、紙は空氣に觸れると乾燥する、乾燥すると紙幅は縮み見當が狂つて來るから、濕りをくれたり、見當を改めたりせねばならないから、「阿國歌舞妓」のやうな技巧のいるものになると、やつと二十枚も摺れるか摺れぬかで、容易に仕事が捗らない。殊に、同じ所の一色で三度も四度も摺りかけねばならぬのです。見易い一例をいへば、雲形の胡粉などでも、三度かけてやつとの事で原畫に髣髴するやうな譯で、目に見え口に話されぬことが多く、隨分苦勞をしたのですが、其お庇で摺りあがつて、先づこの位ゐならと思ふものが出來、其愉快さはまた格別です。假令多少の缺點は見えても苦しかつたことなんかは全く忘れてしまひます。云々(以上摺師阿部鍋五郎氏談)

休息句合の用紙について

本會の複製本の用紙は從來いろ〳〵の種類の紙を使つてゐます。例へば曾我扇八景は土佐半紙で、稗史臆說年代記や鼠花見は大半紙で、手拭合や明月餘情は內山紙でありますが其他の大部分は細川と石州半紙とを用ひました。併し一口に石州半紙と云つても、原料、製造の場所及び製造の季節の關係に依つて紙の色、厚薄、粗密、硬軟の差別を生じます。その爲に人倫訓蒙圖彙の如き刪數の多いものは色々にちがつた石州半紙を混用するやうな結果を見ました。此點は甚だ遺憾に存ずる所で、會員の或方から其理由を尋ねられた事もあります。

前記の如く細川と石州半紙とは割合に多く使用する品物ですから、發行の尠くとも三ヶ月前に紙の準備するのを例としてゐますが、それでも色と質の一定した紙を用ひる事は出來ませぬ。一體和紙は現今一般の需要が少く、隨つて產出高も減少するばかり

閲覧室